

ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちへ

YOKOHAMA EYE'S 2024

ヨコハマアイズ 2024

YOKOHAMA
EYE'S 2024

テーマ

よこはまユース設立20年記念号

青少年育成の20年をふりかえる

「青少年の居場所づくり」の20年

「体験活動」の20年

「青少年を育む人材の育成」「地域活動」の20年

「放課後児童育成」の20年

—職員座談会「子どもたちの放課後」と向き合ってきた20年—

「青少年の学習支援・生活支援」の20年

「青少年の社会参加」の20年

—座談会「平成の青少年と令和の青少年が語り合う～私たちの社会参加活動～」—

特別寄稿「子ども・若者の居場所と関係者のつながりづくり

—よこはまユースと横浜市立大学の連携—

年表

よこはまユース20年のあゆみ



《よこはまユース設立20年記念号》

テーマ 青少年育成の20年をふりかえる

○発行のご挨拶	04
○祝辞	05

I よこはまユースのあゆみ

○年表	06
○歴代代表理事より	12

II 青少年育成の20年をふりかえる

1. 「青少年の居場所づくり」の20年

○「居場所」ではいろいろな音がきこえる ・よこはまユース施設課 青少年交流・活動支援スペース 尾崎 万里奈	16
○地域における青少年の居場所 ・栄区青少年の地域活動拠点 フレンズ☆SAKAE 岩堀 まゆみ	17
○居場所と出会いは『自分の生き方発見』 ・認定NPO法人 多文化共生教育ネットワークかながわ 高橋 清樹	18

2. 「体験活動」の20年

○「体験活動のススメ～野島青少年研修センターでの体験活動をふりかえる～」 ・よこはまユース施設課 横浜市野島青少年研修センター 富岡 克之	19
○「『遊びで育つ 人・まち・未来』～プレイパークが横浜にできるまで～」 ・YPCネットワーク 瀬嵐 理恵	20
○「気づき」を大切にしている体験活動の推進 ・神奈川県青少年センター 指導育成課 栗田 強太郎	21

3. 「青少年を育む人材の育成」「地域活動」の20年

○地域の子どもたちの幸せを願って

- ・ 子どもの幸せを実現する会 谷知 恵美子 22

○地域や団体と結びついた育成活動の拠点として

- ・ よこはまユース施設課 横浜市青少年育成センター 高橋 勇一 23

4. 「放課後児童育成」の20年

- 職員座談会「“子どもたちの放課後”と向き合ってきた20年」 24

5. 「青少年の学習支援・生活支援」の20年

○青少年への学習支援活動における今までの20年とこれから

- ・ 特定非営利活動法人リロード 池田 正則 30

○変わったこと変わらないことーよこはまユースの寄り添い型生活支援事業ー

- ・ よこはまユース事業課 寄り添い事業担当係長 吉田 智之 31

6. 「青少年の社会参加」の20年

○座談会

- 「平成の青少年と令和の青少年が語り合う～私たちの社会参加活動～」 32

7. 特別寄稿

「子ども・若者の居場所と関係者のつながりづくりーよこはまユースと横浜市立大学の連携」

- ・ 横浜市立大学名誉教授・石巻専修大学教授 高橋 寛人 38

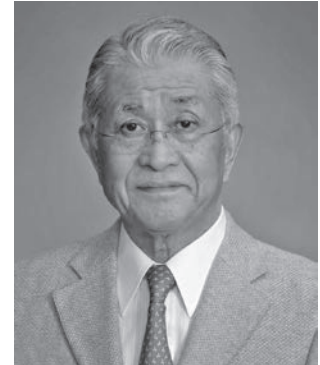
Ⅲ お祝いメッセージ

ーよこはまユースを支えていただいている皆さまからー

. 44

発行のご挨拶

公益財団法人よこはまユース
代表理事 大向 哲夫



このたび、よこはまユースは設立20周年という節目を迎えることができました。これもひとえに、これまで法人とともに歩んでくださった皆様方のご支援の賜物と、深く感謝申し上げます。

私たちの歩みは、「横浜市の青少年育成の総合推進を図ること」を目的として、2005年に社団法人横浜ボランティア協会と財団法人横浜市青少年科学普及協会が統合し、横浜市青少年育成協会が誕生したことから始まりました。その後、2011年に公益法人への移行する際に「よこはまユース」と名称を変更し、現在も「すべての青少年が周囲の人々から見守られ、人とのつながりの中で成長できる社会を醸成する」という理念のもと、地域、行政、学校、企業、そして多くのボランティアの皆様と協働し、青少年が主体的に活躍できる街「横浜」を目指して活動を続けております。

この20年間、SNSをはじめとする情報化社会の進展や価値観・ライフスタイルの多様化など、社会環境の変化に伴い、青少年を取り巻く課題は一層複雑化してきました。また、記憶に新しいコロナ禍では、これまで大切にしてきた「体験する」「ともに活動し、伝える」ことが難しくなり、事業の見直しを求められました。そのような状況下でも、理念に立ち返り、皆様とともに「青少年のために何ができるか」を考え、柔軟で新しい視点に立った事業の実施に取り組むことができました。

法人としてもこの20年間、青少年の体験活動の推進や、青少年を育む地域づくりに加え、放課後キッズクラブの受託、校内居場所カフェの運営、福祉的な要素を含む寄り添い型生活支援事業所の受託など、新たな事業に挑戦し、組織的にも大きく成長を遂げることができました。また、青少年育成と支援を包括的に推進する横浜市唯一の外郭団体として、人材育成研修や企業・団体における青少年活動のコーディネートに力を注ぐなど、中間支援機能の強化に努めております。今後も変化の激しい社会において、すべての青少年が周囲の人々から見守られ、人とのつながりの中で成長できる社会を実現することを使命に、皆様とともに取り組みを続けてまいります。

さて、本号では「青少年育成の20年」をテーマに、市内のさまざまな分野で青少年活動に取り組んでおられる実践者や研究者の皆様とともに、この20年を振り返りました。これまでの活動の軌跡を皆様と共有し、次の10年、20年に向け、新たな一步を踏み出すきっかけとなることを願っております。

最後に、これまで支えていただいたすべての皆様方に改めて感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます、発行のご挨拶とさせていただきます。

祝 辞

横浜市こども青少年局
局長 福嶋 誠也



公益財団法人よこはまユースが、設立20周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

平成17年2月に社団法人横浜ボランティア協会と財団法人横浜市青少年科学普及協会が母体となり、前身の財団法人横浜市青少年育成協会が発足されました。その後、平成23年度には、法人名称を市民に愛称として親しまれていた「よこはまユース」に変更し、青少年育成を専門とする公益財団法人として「青少年活動の支援」「青少年を支える人材の育成」「体験機会と活動の場の提供」の3つを柱に、本市青少年施策の推進に尽力されてきました。

平成16年度に貴法人を中心にモデル事業として9校でスタートした「放課後キッズクラブ」は、現在では市内の全ての市立小学校337校に設置され、小学生の放課後の安全・安心な居場所となっています。また、金沢区にある「野島青少年研修センター」は、平成18年度の指定管理者制度導入後も、長きにわたり管理・運営を担っていただき、海あり山あり自然あふれる環境を生かした体験学習や集団活動、青少年指導者・育成者の研修活動への支援など、年間2万人を超える方々に利用されています。こども青少年局は、平成18年度に新組織として発足しましたので、まさにこの20年間、貴法人と共に青少年の育成に取り組んできたこととなります。

青少年期は、身体も心も大きく成長する時期であり、道徳性や社会性などを育む大切な時期です。校内カフェの運営やイベントの企画、ボランティア活動など、貴法人が提供・支援する様々な体験活動を通じて、青少年は小さな失敗を経験しながらも、直面する課題に全力で取り組み、成功体験を重ね、自己肯定感を高めています。

一方、少子化の進行や地域のつながりの希薄化、ライフスタイルの多様化など、青少年を取り巻く環境は大きく変化しています。全ての青少年のウェルビーイングを支えていくためには、社会全体でこども・青少年の健やかな成長を見守り・支援していく必要があります。中間支援組織として、貴法人に求められる役割は、非常に大きくなっています。今後も公益的使命の達成に向け、本市との連携のもと、青少年の健全育成に取り組んでいただくようお願いいたします。

むすびに、貴法人のますますの御発展と、職員の皆様方の御健勝と御活躍を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

公益財団法人よこはまユース 20年のあゆみ


■ 第1期：(2005年～2010年)

— 2つの青少年育成団体が統合し、 横浜市の青少年育成を担う「横浜市青少年育成協会」が誕生

「青少年を育成するために地域におけるボランティア活動を推進する」ことを目的に、1974年に設立された社団法人横浜ボランティア協会は、青少年が社会とつながるためのボランティア活動や、青少年育成に関わるボランティア活動を推進してきました。

財団法人横浜市青少年科学普及協会は、横浜こども科学館の運営を通じて、「科学を軸にしつつ、知育に偏らず、情操、体力、創造力といった広い視野を持ちながら、21世紀を担う青少年の健全育成を目指す」ことを目的に、1984年に設立されました。

これら横浜市内で青少年育成を担う2つの団体は、「横浜市アクションプラン」(2003年)において「解散・統合すべき団体」と位置づけられ、横浜市の青少年育成施策を総合的に推進することを目的に、2005年2月1日、横浜市青少年育成協会が発足しました。同協会は、「次代を担う青少年の主体性や創造性を育み、心豊かな成長を図るため、市の施策と連携し、学校、地域、市民団体、企業などと協働して諸事業を行い、青少年の育成に寄与する」ことを使命として活動を開始しました。

西 暦 (年号)	おもなトピック
2005年度 (平成17)	<ul style="list-style-type: none">● 横浜市青少年育成協会設立(2月)。● 横浜市青少年育成センター、横浜市青少年交流センター、横浜市野島青少年研修センター、横浜こども科学館の4施設の次期指定管理者として選定される。● ヨコハマ・ハイスクール・ミュージックフェスティバル(YHMF)事務局(～2010)。● 学校と地域とをつなぐコーディネート事業「十日市場中学校地域交流事業」(現在も継続)。● 「居場所づくり全国フォーラム」を日本都市青年会議と共催(～2020)。  <p>「ヨコハマ・ハイスクールミュージックフェスティバル決勝大会(横浜アリーナ)」</p>
2006年度 (平成18)	<ul style="list-style-type: none">● 横浜市の局再編により「こども青少年局」に所管局が変更。より総合的な青少年施策の展開が期待される。● 法人の愛称・シンボルマークを公募により「よこはまユース」に決定。● 若年無業者の保護者を対象とした講座の開催や学齢期児童の就労体験など、青少年の自立支援を目的とする講座や体験活動を市内の若者自立支援の専門機関・関連団体と連携して実施するための取組を開始。



西 暦 (年号)	おもなトピック
2007年度 (平成19)	<ul style="list-style-type: none"> ● 青少年の「自立支援」を軸とした事業を本格展開。3つの基本的な視点を策定。 <ul style="list-style-type: none"> ① 青少年の自立と主体性を促す機会づくり ② 青少年が安心して心豊かに暮らせる環境づくり ③ 青少年の活動を支援するための仕組みづくり ● 横浜市特定協約団体として新たに4カ年の「協約」を締結。
2008年度 (平成20)	<ul style="list-style-type: none"> ● こども科学館がネーミングライツを導入。愛称「はまぎんこども宇宙科学館」。 ● 山梨県道志村での高校生水源林ボランティア活動(～2019)。 ● 自立支援関係団体と連携した宿泊体験「若者自立サポート事業」。  <p style="text-align: center;">横浜こども科学館</p>
2009年度 (平成21)	<ul style="list-style-type: none"> ● 「新公益法人への移行」を中期目標に設定。 ● 新設された横浜サイエンスフロンティア高等学校と連携し、小中学生対象の「よこはまサイエンスプログラム」を実施。 ● 横浜開港150周年記念事業「FUNЕプロジェクト」を開催。 ● 若者自立塾の活動支援。青少年の体験活動事業のサポートスタッフを依頼。  <p style="text-align: center;">「FUNЕプロジェクト(2009)」</p>
2010年度 (平成22)	<ul style="list-style-type: none"> ● 公益財団法人として認定。新財団の名称を「よこはまユース」に変更することが決定。 ● 「爆笑!濱っ子寄席」50回記念として、子どもバックヤードツアー、寄席文字実演など。 ● こども科学館の指定管理者選定から外れる。大幅な組織改変を余儀なくされる。  <p style="text-align: center;">よこはまサイエンスプログラム</p>  <p style="text-align: center;">「爆笑!濱っ子寄席」50回記念 実行委員長挨拶(2010)</p>

■ 第2期：(2011年～2019年)

— 「公益財団法人よこはまユース」へ。厳しい経営状況の中のスタートと、新しい事業展開へのチャレンジ

事業活動収入の4割を占めていた横浜こども科学館の管理運営が終了したため、財政的にも組織体制的にも経営基盤を揺るがす厳しい状況の中、法人の事業規模・組織体制を大幅に縮小・変更しての「公益財団法人よこはまユース」のスタートとなりました。

設置趣旨を『すべての青少年が周囲の人々から見守られ、人のつながりのなかで成長していくことができる社会を醸成するとともに、様々な体験を通じ青少年自らが学び育つ機会を提供することにより、未来を担う青少年の成長に寄与する』ことを目的に、4つの事業の柱（A:青少年活動を支援する事業／B:青少年を支える人材を育成する事業／C:青少年に体験機会や活動の場を提供する事業／D:その他、この法人の目的を達成するために必要な事業）と5つの公益目的事業区分（施設の貸与／講座、セミナー、育成／体験活動等／相談、助言／調査、資料収集）に基づき事業を開始しました。


西 暦 (年号)	おもなトピック
2011年度 (平成23)	<ul style="list-style-type: none"> ● 公益財団法人よこはまユースとしてスタート。 ● 野島青少年研修センターが、東日本大震災の被災者避難所として運営される。 ● 賛助会員制度を「継続寄附制度」に変更。
2012年度 (平成24)	<ul style="list-style-type: none"> ● 西区寄り添い型生活支援事業を受託。 ● 市内放課後児童育成事業従事者の人材育成研修受託（現在も受託）。 ● 人材育成事業「子ども・若者どこでも講座」開始（現在も継続）。 ● 青少年交流センター（ふりーふらっと野毛山）開館10周年記念式典（3月）。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div data-bbox="927 1285 1118 1559">  </div> <div data-bbox="1155 1317 1474 1559">  </div> </div> <p style="text-align: center;">十日市場中学校地域交流事業のチラシ (2010)</p> <p style="text-align: right;">「子ども・若者どこでも講座」</p>
2013年度 (平成25)	<ul style="list-style-type: none"> ● 中期経営方針（5カ年）を策定。 重点方針:①地域と取り組む青少年育成 ②健全育成の方法や資源を活用した青少年の潜在的リスク解消・軽減及び自立支援 ● 賛助会費・寄付金で陶芸窯を購入。青少年の文化体験充実のために、青少年交流センターに設置（現在、野島青少年研修センターに移設）。 ● 事業評価システムを導入。 ● 道志村児童受け入れ事業開始。横浜の水源林である道志村の小学校5年生が来浜し、横浜市内の社会見学や小学校との交流などを1泊2日で実施（現在も継続）。




西 暦 (年号)	おもなトピック
2014年度 (平成26)	<ul style="list-style-type: none"> ● より効果的・効率的に執行できるよう組織を見直し、新体制でスタート。 ● 野島青少年研修センターにランドリー設備を整備。 ● 横浜市内で子ども・青少年に関わる活動に関わる活動関係者の「大交流会」を開始。規模やジャンルを超えたネットワーク形成の場に（現在も継続）。  <p>道志村水源林ボランティア活動(2014)</p>
2015年度 (平成27)	<ul style="list-style-type: none"> ● 「子ども・子育て関連3法」が施行。 ● 青少年交流センター（ふりーふらっと野毛山）が、新耐震基準を満たしていないことにより閉館（3月）。
2016年度 (平成28)	<ul style="list-style-type: none"> ● 青少年交流センター代替事業として、青少年の交流・活動支援スペースを桜木町ぴおシティに開設。公募により、愛称を「さくらリビング」に決定。 ● 中退や進路未定などのリスクを抱える高校生への支援として、横浜市立大学をはじめ市内NPOと連携し「校内カフェ」事業を開始（横浜総合高校「ようこそカフェ」）。  <p>「ようこそカフェ」</p>
2017年度 (平成29)	<ul style="list-style-type: none"> ● 法人本部を「横浜メディア・ビジネスセンター」（中区）へ移転。 ● 関内ホール改修工事にともない、青少年育成センターを代替施設にて運営開始（10か月間）。 ● 青少年の体験活動に関する調査を実施。青少年期における多様な体験や人との出会いが意欲や主体性、社会性に大きな影響を与えるが、若い年代ほど身近な地域でその機会が少なくなっていることが明らかになる。
2018年度 (平成30)	<ul style="list-style-type: none"> ● ようこそカフェ事業の安定運営に向けて、クラウドファンディングを実施。目標を達成。 ● 法人広報の一環として、Twitter（現X）、Facebookを開設。
2019年度 (平成31 /令和1)	<ul style="list-style-type: none"> ● 「外国につながる高校生の案内通訳ボランティア」を桜木町駅前広場で実施。ラグビーW杯日本大会決勝戦に沸く横浜で、訪日観光客向けの案内通訳として、外国語を母語とする高校生が活動（11月）。 ● コロナ禍の影響により、2月中旬から指定管理施設及びさくらリビングの臨時休館及び新規利用受付の中止のほか、放課後キッズクラブ活動時の密を避けるため、区分2の登録児童のみの受け入れが決定。  <p>外国につながる高校生の案内通訳ボランティア(2019)</p>

■ 第3期：(2020年～2024年)

— 青少年の体験機会や地域における交流機会が失われたコロナ禍。「つながり」をテーマに、中間支援機能の強化へ

コロナ禍により、価値観・ライフスタイルの多様化が益々進展し、人間関係の希薄化や地域活動の継続が困難となり、連帯感が薄れつつある中、「対面」「体験」を大切にしてきた事業のあり方を見直す必要に迫られました。オンラインでも十分効果が発揮できるよう事業展開を工夫し、「つながり」をテーマに、青少年を育む地域がますます活性化するため、人材育成やコーディネートなど、中間支援機能の強化に取り組みました。

西 暦 (年号)	おもなトピック
2020年度 (令和2)	<ul style="list-style-type: none"> ● コロナ禍（緊急事態宣言発令）により、青少年施設の休館や開館時間の短縮・利用制限のほか、事業や講座・研修の中止等。 ● オンラインの手法を活用した交流（居場所づくり）や研修・講座・会議の実施、動画の配信など新たな工夫に取り組む。 ● 横浜市少年五団体と連携し、「withコロナにおける体験活動の意義を考える」座談会を実施。 ● 「爆笑! 濱っ子寄席」がコロナ禍の影響により初の中止。 ● 第3期経営方針（2022～）を策定。コロナ禍による「交流の分断」「孤立化」を踏まえ、テーマを「つながり」とする。 <div style="text-align: right; margin-top: 10px;">  <p style="font-size: small;">緊急事態宣言時のオンラインでの若者の居場所づくり（さくらリビング）</p> </div>
2021年度 (令和3)	<ul style="list-style-type: none"> ● 「第3期経営方針」による事業スタート。withコロナ、孤立予防を意識した事業を展開。 ● 「団体運営の方向性及び協約」のスタートの年として、中間支援組織としての役割を強化。 ● 神奈川県寄り添い型生活支援事業を受託。 ● 経営向上委員会でこれまでの取組みが評価され、団体経営の方向性が「事業の整理・重点化等に取り組む団体」から「引き続き経営の向上に取り組む団体」に変更になる。 ● ジョンソン株式会社からの助成により、コロナ禍による課題を踏まえた「社会的孤立と児童虐待防止プロジェクト」を市内プレイパークと連携して実施。 ● 成人年齢引き下げ（2022～）により、青少年にかかる影響について、勉強会の実施やヨコハマアイズ特別号を発行。

西 暦 (年号)	おもなトピック
2022年度 (令和4)	<ul style="list-style-type: none"> ● オンラインでの事業実施方法が充実し遠方からの参加者数が増加。 ● 中区寄り添い型生活支援事業を受託。 ● コロナ禍で活動を休止していた団体等から「活動継続」を中心に相談が増加。 <div data-bbox="1003 331 1474 680" style="text-align: right;">  <p data-bbox="1018 680 1460 707">オンライン配信による研修の実施(育成センター)</p> </div>
2023年度 (令和5)	<ul style="list-style-type: none"> ● こども家庭庁が発足。「こども基本法」が施行(4月)。 ● 新型コロナウイルス感染症の5類感染症以降により、対面形式による事業とオンライン参加を併用して実施するなど、アフターコロナを見据えた事業展開。 ● ユースワーカー協議会と連携し「ユースワーカー養成講座」を実施(9月)。 ● 次期中期経営計画のテーマは、前期テーマを発展させ『「つなぐ」を合言葉に、青少年とともに』とする。
2024年度 (令和6)	<ul style="list-style-type: none"> ● 第4期中期経営方針と、新たな団体運営の方向性及び協約」がスタート。 ● 校内カフェ「ようこそカフェ」に続き、戸塚高校定時制での「食事会」及びカフェ「とまりぎ」、みなと総合高校での「みなとカフェ」を実施。「みなとカフェ」は東急(株)の助成により実施。 ● ジョンソン株式会社助成による「移動型交流カフェプロジェクト」を実施。10代・20代の若者が立ち上げた団体と連携し、繁華街、中学校、通信制高校など「若者がいる場」に出向いた居場所づくり。 ● コロナ禍で中止及び日帰りで実施していた「野島クリスマスキャンプ」を宿泊事業として再開(11月)。 <div data-bbox="1003 1167 1474 1516" style="text-align: right;">  <p data-bbox="1003 1516 1474 1570">横浜駅西口で行った「移動型交流カフェ」プロジェクト(4月)</p> </div> <div data-bbox="1003 1592 1474 1942" style="text-align: right;">  <p data-bbox="1003 1942 1474 1973">野島クリスマスキャンプに参加した子どもたち(2024)</p> </div>



野並 直文さん（株式会社崎陽軒 代表取締役会長）

2005年2月から2008年3月 横浜市青少年育成協会理事長



「設立1周年記念式典」
(2006)野並理事長挨拶

20周年、誠におめでとうございます。

協会との出会いは昭和51年頃の水泳教室をJC（青年会議所）のメンバーとしてお手伝いしたことでした。私は子供達の受付を担当していたのですが、じゃれ合っているうちに子供達が私の肩や頭の上まで登ってきました。そんな様子を見てた某先輩が後日、良い娘がいるから会ってみないかと見合い話をもってきました。まだ結婚するには早いと思っていましたのでお断りしましたが子供好きなヤツと見られたようです。

それから10年程たってJCの理事長に就任すると同時に充て職としてボランティア協会の理事として再びおつきあいすることとなりました。1年たち交代するはずだったのですが、当時の専務理事から残ってくれと言われて、やがて副理事長、そして理事長に就任し、長く協会活動にかかわることとなりました。

理事長時代の思い出は協会の名称がボランティア協会から青少年育成協会へ変更になった事です。私はその変更に抵抗したのですが、福祉団体と誤解されるという事で押し切られてしまいました。

20年程前、横浜商工会議所の某会頭が次の様な挨拶をしていました。「私は体調悪くして車いす生活となってしまいましたが、駅などで親切に手をさし延べてくれるのは大人ではなく、みんな若い人です。最近の若い連中はなっていないとか言う人がいますが、そんな事はありません。大いに期待していいと思います。」と言っていたのが印象的でした。私もそう思います。

川本 守彦さん（川本工業株式会社 代表取締役社長）

2008年4月から2011年3月 横浜市青少年育成協会理事長

設立20周年 誠におめでとうございます。

横浜市青少年育成協会の理事長を務め、また現在当公益財団法人の評議員をさせて頂いている立場で一言ご挨拶を申し上げます。

色々と有りました。指定管理の問題、放課後キッズクラブの件等々、良い思い出も辛い思い出も、この法人として有りました。そして、それなりの実績も積み重ねてもきました。

しかしながら、それに浸っている訳にはいきません。今迄の当法人の実績を知見として、当法人の掲げる「すべての青少年が周囲の人々から見守られ、人のつながりのなかで成長していくことができる社会を醸成するとともに、様々な体験を通じ青少年自らが学び育つ機会を提供することにより、未来を担う青少年の成長に寄与する」を目的とし、絶えずその先を見据え、社会的ニーズ・青少年ニーズを的確に把握して、青少年問題に先駆的に取り組んでいって頂きたいと思います。

そして、諸事業の実施に当たり、計画段階では関係者間で色々意見と意見をぶつけ合い、方向性が決まった時には、その目的・目標達成に向け一枚岩で突き進み、結果を客観的に検証し、次に生かす組織体を絶えず目指してもらいたいと思います。そんな法人をこれからも応援して参りたいと思います。

今後、当法人の益々の発展を心よりご祈念申し上げ、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

大槻 哲夫さん

2009年4月1日から2011年3月31日 横浜市青少年育成協会 専務理事
2011年4月1日から4月30日 よこはまユース代表理事

設立20周年おめでとうございます。

携わったのは2年間と短い期間でしたが、多くの出来事がありました。市の外郭団体であるため当時の改革路線に晒されるなど、試練を味わった時期でした。

その中で今も強く印象に残っているのは、3月11日の東日本大震災です。多くの施設を預かり運営している立場でありながら、地震発生直後には呆然として直ぐには何をすべきか考えられなかった記憶があります。

次第に入る情報から掴めてきたのは、インフラが機能不全に陥るなか、多くの施設でよこはまユースの職員が自分たちで知恵をしばり判断し、子どもたちや来館者の保護に努めてくれたことです。このように混乱した状況の中、各施設で職員が臨機に行動をしてくれた結果、翌日の昼頃には全施設の安全や対応を確認することができました。これは職員たちが日頃から仕事への心構えを持ち、それを実践できた結果であり、この組織が信頼を得ている基だと確信した出来事でした。

当時あの災害にあい今までにない体験をした若かりし職員たちが、今では管理職になっています。この職員たちがこれからのよこはまユースの経営を担い、進化させてくれることを願ってやみません。

三田 修さん

2011年5月から2016年3月 よこはまユース代表理事

よこはまユースに携わった当初、友人から横浜を本拠地とするサッカーチームのユース部門に関わっているのかと勘違いされたことがありました。よこはまユースの名称は、当時、ポップだなと思いました。

2011年着任した年は、大地震と公の施設の指定管理者制度の影響で法人の運営に大きな課題が覆い被さっていました。常務を始め職員とともに一つずつ課題の解決に取り組んだ記憶もつい最近のように感じます。そのときに強く感じたのは、常務を始め職員の青少年に対する熱い思い、個々人の持つ類い希なるスキルでした。

こうした情熱とスキルを活かして事業の提案、実現を目指し法人の運営を確立していったように思います。事業の枠組みを一から考えて、準備を進め、青少年の寄り添い事業を立ち上げたこともありました。法人の事業拡大の貴重な一つだったと思います。

今、少子化や若者の将来への不安など青少年を取り巻く環境は難しいものがあります。そんな中で、よこはまユースは、行政、他の公益セクター、民間セクターと連携して、青少年の元気を引き出す施策を展開し続けてくれることを期待します。



Ⅱ 青少年育成の20年をふりかえる

この20年間、青少年を取り巻く社会環境は大きく変化し、多様な課題と可能性の中で、私たちは地域や青少年団体、行政、学校、企業の皆さまとともに青少年育成活動に取り組んできました。

この章では、「青少年の居場所づくり」「体験活動」「青少年を育む人材の育成と地域活動」、福祉的な要素を持つ施策として2010年代から取り組みが始まった「学習支援と生活支援」の分野において、横浜市内で活動する団体の皆さまとともに振り返りました。さらに、社会の変化とともに制度やあり方が注目される「放課後キッズクラブ」、時代が変わってもその重要性は変わらない「青少年の社会参加活動」について、従事するスタッフや若者とともに振り返っています。



『『若者がつくる若者の居場所づくり』移動型交流カフェプロジェクトのメンバー』(2024)

■ 青少年の居場所づくりの20年

よこはまユースは、社会全体で青少年を育てる環境づくりの一環として、「青少年の居場所づくり」を推進・支援しています。時代とともに必要とされる居場所のかたちは変化しますが、変わらず青少年を見守り支える人々がいまいます。ここでは、市内7か所に展開する青少年の地域活動拠点、外国につながる青少年の支援と校内居場所カフェ、そしてよこはまユースが取り組んできた居場所づくりの歩みを振り返ります。

「居場所」ではいろいろな音がきこえる

青少年交流・活動支援スペース
施設長 尾崎 万里奈

わたしがよこはまユースに入社した2012年は「横浜市青少年育成協会」から「公益財団法人よこはまユース」へと移行した翌年、法人事業も大きな変化のなかにありました。

2013年に、「ふりーふらっと野毛山」の愛称で親しまれた「横浜市青少年交流センター」の職員として配属されたわたしは、それまで、ぼんやりとしたイメージしか持っていなかった青少年の「居場所づくり」にたずさわることになりました。

2002年の開館から10年を経た施設は、地域の小学生から20代の社会人まで広い年齢層の青少年や地域の大人たちがともに過ごす、小さなコミュニティとして地域に根付き、多くの青少年にとっての「居場所」になっていたと記憶しています。

同時に、2000年代半ばから「子どもの貧困」が日本社会の課題としてクローズアップされた時期とも重なって、困難な状況で育つ青少年にとっての、家庭や学校、身近な地域以外にある「居場所」としての役割が強く求められた状況でもありました。

さまざまな青少年との出会いと新鮮な驚きに満ちた2年間の経験は、わたしにとっての「居場所づくり」や青少年育成の意味、法人職員としての役割を考える「原点」になっています。

あれからの10年間で、「居場所づくり」は変化したのでしょうか。

近年では「ユースワーク」「ユースワーカー」という言葉の広がりとともに、かつての「青少年の健全育成」や「若者自立支援」「困難を抱える子ども・若者の支援」といった文脈がゆるやかに統合され、「居場所」・「居場所づくり」

にも新しい意味が与えられつつあります。

法人の活動においても、これまで培った「居場所づくり」や体験活動の実践ノウハウを活用しながら、青少年の“育成”と“支援”が混ざり合う新しい事業展開を模索してきました。

学校内へアウトリーチする「高校内居場所カフェ」、さまざまな背景をもつ青少年の生活及び学習を支援する寄り添い型生活支援事業、そして、2016年に閉館した交流センターの役割を引き継ぎつつリニューアルした「青少年交流・活動支援スペース（愛称：さくらリビング）」など、公共の施設という場にとどまらず、地域や学校のなかでいろいろな形の「居場所づくり」に取り組み、ひとつひとつが、そこで過ごす青少年とともに育ち、今日も、青少年の“声”を聴いて変化しつづけていると感じます。

青少年の「居場所づくり」にかぎらず、ひとつの場は、そこにいる人たちの声やふるまいによって変化します。

それぞれの場で聞こえてくる“声”に耳を傾け、素直に向き合うこと、そこで生まれる相互の交流を楽しむことが、形は変わっても変わらないわたしたちが目指す「居場所づくり」ではないかと考えています。



受付でスタッフと話す青少年(2016)

地域における青少年の居場所

栄区青少年の地域活動拠点 フレンズ☆SAKAE
岩堀 まゆみ

2011年3月に中高生世代を中心とした青少年の居場所として栄区青少年の地域活動拠点 フレンズ☆SAKAEが開所した。ちょうどその頃、高校受験のための塾がいくつか拠点のそばにできたこともあって、当初は塾に行く前に寄って勉強する中学生が多く、小学生も多かった。ある日、小4と小6の姉妹が来所した。ほぼ毎日来るようになり、何をすることもなく、スタッフとおしゃべりしたり、姉妹で歌を歌ったりして過ごしていた。二人とも痩せていて、勉強は好きではなく、学校に行ったり行かなかったりのようにだった。兄もいるようだったが、こちらは不登校とのことだった。やがて2人とも中学生になり、段々と家庭の事情もわかるようになった。両親ともにアルコール依存があり、経済的にも厳しい状況と知る。フレンズ☆SAKAEにはずっと来続けていて、いつも同じように笑って、歌って、おしゃべりしていたけれど、2人にはどんな気持ちがあったのだろうか？

来所する子どもたちの中には大人に反抗的な子、物を失くす等、何かと手がかかる子、攻撃的な言動が出てしまう子もいる。目に余って注意すると、「こんなとこ二度と来ない!」と捨て台詞のように言って帰る子も時々いたけれど、二度と来ないとわざわざ宣言する子は必ず次回がある。小学生から暮らすように利用している子の中には、中学生になっても高校生になっても社会人になっても来続けている利用者もいる。部活や受験でしばらく遠ざかっていて、何かのきっかけでまた利用が復活する利用者もいる。長い間、来所することもなかったのに急に訪ねてくることもある。小・中・高と進学しても社会人になっても、行ける場所がある、行く場所があると思えることが大事なのかもしれない。

フレンズ☆SAKAEで暮らすようにしている子どもたちは、年齢や所属を気にせず、来所した子を受け入れる。ランプ、百人一首、カードゲーム等、年長者が声をかけ、誘い、利用者みんなで遊ぶ。家庭環境や不登校、生活困窮のことなども普通に話す。聞いた子たちも、フラットに受け止め

ているように見える。他人には見えない事情がそれぞれにあつて、自分だけが大変なわけではないことを知っていく。

コロナ禍を経て、一度は極端に減ってしまっていた小学生の利用が増えてきた。以前の小学生は上級生がいて静かになった。ましてや制服を着た中学生がいたら、遠慮がちに過ごしていたものだった。最近の小学生は6年生がいても中学生がいてもビビらない。同世代だけで過ごしている時と同じように遊んでいる。中学校に行っても、先生と生徒の会話が非常にフレンドリーだ。保護者と先生も良く言えば気さくな感じがする。封建制が良いとは全く思わないけれど、何か忘れ去られていないか?と不安にもなる。大人ともフレンドリーなこの子たちはどんな大人になるのだろうか？

子どもたちを観ていて思う。自分のこれまでを知っている大人に時々会うことで自分を振り返っている。辛い時、これまでを知っていて、頑張ったね、辛いね、と言ってもらいたい。いいことがあった時に、良かったね、おめでとう!と言ってもらいたい。今までのことを全部話すのは面倒だけれど、生きてきた軌跡をわかった上で、感情を分かち合うことを望んでいる。誰か大人に。そんな場所がすべての青少年の身近にあったらと願う。



メイク講座の様子

居場所と出会いは「自分の生き方発見」

認定NPO法人 多文化共生教育ネットワークかながわ
事務局長 高橋 清樹

当団体（略称ME-net）は外国につながる子どもや若者への支援を中心とした活動をしてきました。活動の原点は30年前に行った「日本語を母語としない人たちにための高校進学ガイダンス」にあります。当時、大和に難民定住センターがあり、インドシナ難民の若者が「日本の高校で学びたいが、どうすれば高校に進学できるか」という問いかけに応じて実施したのがガイダンスでした。ガイダンスをきっかけに、日本語教室等で関わる支援者、言語サポーター、教育関係者等が集まり、ガイダンス実行委員会ができ、毎年ガイダンスを実施続ける中で、現在のME-netになりました。

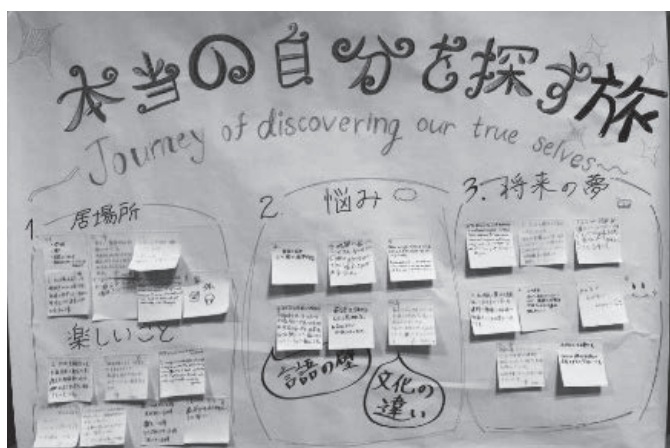
この20年を振り返ると、外国につながる子どもは2倍以上に増えていて、増加は著しいものがあります。その中で、私たちの活動は、高校進学ガイダンスに加えて高校入学後の支援や高校卒業後の進路選択（キャリア形成支援）へと拡大してきました。その一つがよこはまユースと一緒にスタートに関わった、横浜総合高校の「ようこそカフェ」です。2015年に奇しくも高校内での居場所として校内カフェの実施を提案したのが、当団体とよこはまユースでした。当時ME-netは、県の事業である「かながわボランティア活動推進基金21」の助成金を受けていたので、それを活用して「ようこそカフェ」を共同でスタートしようということになりました。

私自身、高校内での居場所として「ようこそカフェ」で学んだことがたくさんあります。

その中でひとつ上げるとすれば、高校生が多くの不安を抱えながら学校生活を送っている中で、こうした居場所が安心でき、様々な不安を素直に話してくれる場になることでした。

もう一つ紹介したいのは、ME-netの若者交流事業として毎年行っている「オルタボイスキャンプ」です。よこはまユースが運営する野島青少年研修センターを借りて1泊2日で実施しています。このキャンプは参加した外国につながる高校生にとって人生を変えるほど大きな場となっています。日本にやってきていきなり入った学校で、日本語もわからず孤立しがちな若者たちが、同じ境遇の者同士、心を開いて思いのたけを語り合う貴重な場になっているからです。この場を経験した若者の多くが先輩リーダーとなっており、毎年のように参加することからもこの場の大切さがわかれると思います。

次の時代を創っていく若者たちが、色々な人間との交流を通して、自分を発見し、自分らしく生きていくために、若者への支援とともに、次世代の人財育成を共に続けていければと思っています。



■ 体験活動の20年

青少年期における豊かな体験は、自ら学び考える力など「生きる力」の基盤となることが調査で明らかになっています。私たちはこれまで、地域で青少年が多様な体験を積む機会を提供するとともに、体験活動の重要性やその成果を発信してきました。ここでは、体験を通じた青少年育成に取り組むプレイパーク、神奈川県立青少年センター、そして野島青少年研修センターの活動を振り返ります。

体験活動のススメ～野島青少年研修センターでの体験活動をふりかえる～

横浜市野島青少年研修センター
センター長 富岡 克之

野島青少年研修センターでは、「リアルな体験」を大切にしています。この20年で大きく変化したと感ずることとして「情報化の進展」があります。私が社会人となった2000年頃からパソコンが普及し始め、今やスマートフォンなど情報通信機器は一人1台の時代になりました。これら機器の普及により生活の利便性の向上やコミュニケーションの多様化など生活スタイルも大きく変化しています。知りたい情報に直接アクセスできるなど効率性や利便性が向上する一方で、これまでのように手間暇をかけて得る達成感や過程の楽しみなどが失われつつあるように感ずます。だからこそ、時代に逆行していますが「リアルな体験」が重要だと思ふのです。

研修センターの目の前には、横浜で唯一残された自然の海浜があり干潟となっています。その干潟ではカニを手づかみしたり、魚をすくったり、ゴカイの卵を触ったり、インターネットの情報では得られない五感を使った活動を経験することができます。最近の子どもたちは、インターネット等で事前情報を得ているので、生き物に関してとても詳しいのですが体験が伴っていないため、実際に採取して触ってみたり観察してみたりしながら自分の知識と現実が結び付いた時、子どもたちはとても驚き、喜び、誇らしげに振る舞う姿を見せてくれます。そんな姿を見るのが私たち職員何よりの楽しみです。体験的な学びは、一方的に知識を与えられるものではなく、自ら考え試行錯誤を繰り返しながら

自分なりの答えにたどり着くことに意味があり楽しみや喜びがあると思ずます。そして、そこで得た考えや感情を仲間と共有していくことで豊かな心を育んでいくことに繋がると考えます。

最近では生成AIといったデジタル技術の革新がますます進化し、子どもたちに多様な知識を与えてくれる状況が生まれています。だからこそ研修センターでは、デジタル技術では経験できない実体験や実践の機会を提供し続け、これからも体験活動を通して子どもたちの豊かな心を育んでいきたいと思ふます。

「時代は変われど、体験活動の大切さは変わらない」。



野島海岸での干潟観察

「遊びで育つ 人・まち・未来」～プレイパークが横浜にできるまで～

YPCネットワーク

瀬嵐 理恵

今から二十数年前、よこはまユースがまだボランティア協会だったころ、横浜にプレイパークを創りたいメンバーと、ボランティア協会と市民局が協議し「遊びのボランティア育成研修」を4年間協働で実施してきました。この研修をきっかけに、私達は「横浜にプレイパークを創ろうネットワーク（YPC）」を発足させ、その頃からのご縁でお世話になりながら現在に至っております。同じ青少年のこどもたちの育成を考えている仲間として本当に心強く思っております。

30年前、横浜には児童館など子どもが遊べる場が無いことにショックを受け、「無いなら作ろう」と仲間と生涯学習を利用してプレイパークづくりをスタート。1993年ごろから、私たち以外にも、子どもの遊びに危機感を感じた親たちがそれぞれの地域で遊び場を展開していました。その仲間とつながったのが2002年。横浜市中期政策プランに「子どもの遊びの支援」と「プレイリーダー」が盛り込まれたのを機に、毎月情報交換会がはじまりました。「遊びのボランティア育成研修」を企画運営することで、つながりが深まり「横浜にプレイパークを創ろうネットワーク」をNPO法人化。2006年度「かがやけ横浜こども青少年プラン」の重点事業となり、横浜市からプレイリーダー雇用費が補助されるようになりました。

「子どもたちが自然の中で、地域の中で、のびのび遊べる自由な遊び場」「子どもたちのやってみたい、を大切にしたい場」を作りたい。そこにはプレイリーダーという専門職を仕事として常駐させたい。誰でも遊びに来られる場にするために、市内の公園で、参加費のいらない遊び場が必要でした。そのためには横浜市から資金をだしてもらいたい、と子育て中の母たちが奔走した日々。補助が決まったときは「夢がかなった～」と本当にうれしかったことを覚えています。

喜んでいただけの間。今まで主婦だった私たちが法人運営をしていかななくてはなりません。様々な機関へ相談に行ったり、仲間と知恵を寄せ合い、手探りで進んできました。多くの人たちの理解と協力があったこと、そして何より子どもたちの自由に遊ぶ姿が私たちの原動力になっています。また、それを仲間と共有したり、新たな人たちと出会

い、繋がり、喜びを感じています。

YPCネットワークも発足から20年。子どもを取り囲む環境も変化してきました。当初7団体から現在では22団体とプレイパークが広がってきました。

毎回親子で賑わっていたプレイパークも就労社会に変化するとともに平日の参加者は激減。小学生も平日休日習い事やイベントで、自由に遊ぶ時間が少なくなってきたように思います。また、当初の運営メンバーの高齢化も始まり世代交代の時期でもあります。長年プレイパークを開催していると、子どもと一緒にプレイパークを訪れた親たちが地域に関心を持ちはじめ、運営に関わってくれることもあります。子どもを見守る大人が増えれば増えるほど、子どもは安心して育っていくと思っています。

「子どもに遊びは大切」と実感している私たちがプレイパークを開催し続け、子どもに寛容な地域を創っていくことがプレイパーク活動です。国も「子どもまんなか社会」に向けて様々な取り組みが始まっていますが、私たちも今まで通り、日常的な遊びの場でこどもの「やりたいこと」ができる場を地域で作り続け、広げていくことが大切と考えています。更にはプレイパークでのこどもの様子を積極的に社会に発信していく時期に来ているのではないかと感じています。

課題はいろいろありますが「子ども時代は楽しかった」の思える人たちがたくさんいる社会になることを願って、子ども関連の活動している団体と繋がりながら活動していきたいと思っております。

今後ともよろしく願っています。



プレイパークにて

「気づき」を大切にする体験活動の推進

神奈川県青少年センター 指導育成課
課長 栗田 強太郎

『背中を丸め、挨拶もそこそこに玄関を入り、「会社が行けというから、来る気はなかったが連れてこられた」「いまさら集団生活なんて」という表情の面々…』。

かつて県立青年の家に勤めていたころ、利用団体の入所式でよく見られた光景です。「自分が希望した研修ではないから、面白くない」、こういった気持ちが入所式での表情に現れるのでしょうか。ところが、ここから始まる1泊2日や2泊3日の協働生活で、レクゲーム、野外炊事、オリエンテーリング・ウォークラリーあるいは登山、キャンドルファイヤーといった様々な体験活動を重ねるうちに、いつの間にか「自分の殻」を破り、前向きな気持ちになっていく。そして、退所式では入所時とはまるで違う、いきいきとした表情で並んでいる。当時、こういう場面に何度となく遭遇しました。そのたびに、体験活動の持つチカラがいかに大きいかを感じたものです。また、利用者の表情（意識）が変化していくもう1つの理由として、そこに関わる施設職員の存在も大きいと感じました。施設利用のオリエンテーションをする、プログラムの説明をする、さらには、一緒に食事や食器洗いをし、清掃も利用団体と一緒にやる※、そのような1つひとつの積み重ねにより利用者に安心感が生まれ、信頼関係を築く（築こうとする）ことで、「単なる体験活動」から「体験活動を通して、これからの自分自身を考えるきつ

かけ」に繋がっていくのでしょうか。

今は宿泊設備や野外活動のフィールドを持たない施設で指導者養成事業を担当しています。時代や施設は変わりましたが、「体験からの気づき」や「事業に参加される皆さんとの信頼関係づくり」といった姿勢は今の所属にも受け継がれています。

コロナ禍を経ていつもの日常が戻りましたが、それ以前の日常とは違い、「人との関係がうまく築けず、集団形成に苦慮している」といった声が様々な現場から聞こえてきます。対面での活動が大きく制限された期間は、「体験活動」や「みんなで協力してひとつのことを成し遂げる」といったことの必要性に改めて気づいた期間でもありました。子ども・若者自身が様々な体験活動にチャレンジできる環境を整えていくこと、また、そのような子ども・若者を支援・指導するみなさんのお役に立つ事業運営や情報発信が我々の使命と捉え、これからも積極的に取り組んでいきます。

※当時「青年の家神奈川方式」と言われ、全国的にも注目された運営スタイル。



イニシアティブゲーム「キーパンチ」



「火起こしの様子」

■ 青少年を育む人材の育成、地域活動の20年

時代の変化に伴い、地域における青少年活動も多様化しています。よこはまユースでは、青少年を支える人や団体、さらに「これから青少年の力になりたい」と考える人々を応援し、地域の資源が連携して青少年を育てる体制づくりを支援しています。ここでは、ボランティア主体で地域の子どもたちの育成と課題解決に取り組む「子どもの幸せを実現する会」、団体活動の拠点として、講座・研修を通じて人材育成に取り組む青少年育成センターの実践を振り返ります。

地域の子どもたちの幸せを願って

子どもの幸せを実現する会
事務局長 谷知 恵美子

「子どもの幸せを実現する会」は、平成20年に発足し16年目を迎えます。滝頭地区連合、岡村地区連合、磯子地区連合からなる岡村中学校区の子どもたちを、自治会・町内会・青少年指導員、民生児童委員協議会、PTAなど地域の大人と学校が連携し、見守っています。

よこはまユースには、横浜市こども青少年局の地域活動拠点のモデル事業終了後の平成24年度～31年度まで予算と人的支援でお世話になりました。その後も当会の全体会（総会）に参加して頂いたり、講演会の講師をご紹介頂いたり、その講演会のポスターも考えて頂きました。落語会のお誘いや、時折交流室にもお出掛け頂いています。コロナ前での茶道教室では、子どもたちに「あのお姉さん来ないの?」と言う声もありました。

地域活動を長く続けるにあたり、一番の課題となるのは活動資金です。当会では民間の助成金を受けたあと、学校の紹介で三連合町内会の助成金を頂き運営しています。その中で賄えない活動は、別に活動を分け名称を変えて区の社会福祉協議会の助成金を頂くなど、さまざまな工夫をしながら16年続けてこられました。

会の活動は11班に分かれ、朝のあいさつ運動に始まり、校内清掃、授業参観、勉強会、パトロール、広報誌（えりまねニュース）の発行などですが、基本は子どもたちの見

守りです。子どもたちが安心・安全に生活を送れるように、大人たちが協力して「できる人が、できるときに、できることを」をモットーにコツコツと活動を進めてきました。登下校に、子どもたちに声掛けをする。そんな小さな地味な事でも続けることは大事なことだと思います。

現在、お昼休みには、私たちの活動場所である第一地域交流室に子どもたちが来ます。セラピー犬がいることもあります。いろいろなことを話しています。3年間はあっという間で、子どもの成長に驚かされますが、子どもたちは素直で可愛く、自分が子育てしていた頃とは違った感覚があります。心から心身ともに成長を願うばかりです。卒業生が訪ねてきてくれることも嬉しいことです。

活動に関わってきた中で感じるのは、各公的機関、各団体、地域、学校、保護者の皆様、大人たちが仲良くしていれば子どもたちも素晴らしい環境の中で育っていくのではないかということです。



朝あいさつ運動

地域や団体と結びついた育成活動の拠点として

横浜市青少年育成センター
センター長 高橋 勇一

横浜市青少年育成センター（以下、育成センター）は、青少年を支える人や団体、そして青少年の力になりたいという方たちを応援する青少年指導者・育成者の拠点施設として、昭和61（1986）年の設置から前身のボランティア協会によって青少年活動の推進と青少年活動の指導者・育成者の活動支援が行われてきました。当時の育成センターは協会の本部や少年団体の事務室、団体交流室があり、地域や団体で活動する青少年指導者・育成者の方々と混然となって事業に取り組む機会が多く、それこそ青少年に関わる様々な人々が顔をつき合わせて集う居場所的な雰囲気があったと聞いています。現在も続いている法人事業の中には、こうした場から誕生したものもあり、青少年への思いを同じくする方々の手によって連綿と受け継がれています。

平成17（2005）年に法人の起点となる横浜市青少年育成協会設立によって『すべての青少年が周囲の人々から見守られ、人とのつながりの中で成長できる地域づくり』を掲げた現在の法人組織・運営が確立されました。その後、育成センターは指定管理者制度導入や協会本部の移転があり、“育成活動の拠点”として施設活用は新たな局面を迎えました。このような状況においても、これまで築いてきた地域や団体とのつながりを大切にしながら地域活動のニーズ把握につとめ、施設・事業運営の基礎となる思いは変えないように努めてきました。また、地域の青少年活動が停滞したコロナ禍には、活動維持の相談やオンライン機器導入など柔軟な対応で寄り添ってきました。

現在は、指導者・育成者の拠点として従来の場の提供による活動支援に加え、人材育成を目的に、青少年課題を

テーマとした基礎研修、専門研修、スキルアップ研修など多様な研修を実施しているほか、次世代人材育成に関する事業、青少年に関わる人たちのネットワークづくり支援など、青少年を見守り育てる人・地域のすそ野をひろげる幅広い取り組みを行なっています。

法人設立から20年、社会環境や生活様式の変化に伴い、青少年を取り巻く状況も大きく変わっています。青少年課題も多様化し難しい対応が求められる時だからこそ、育成センターはこれからも青少年と関わる皆さんと一緒に青少年の課題に向き合い、青少年が健やかに成長できる社会へのお手伝いができるよう運営していきたいと思っています。



地域で子ども・青少年に関わる方が一同に会する“大交流会”。
ここから新しいつながり、活動も生まれています

■ 職員座談会「“子どもたちの放課後”と向き合ってきた20年」

放課後キッズクラブは通いながっている小学校の施設を活用し、学校や保護者、地域の皆さまにご協力いただきながら、すべての子どもたちにとって安全で快適な「放課後の居場所」を提供しています。よこはまユースでは2004年、横浜市の放課後キッズクラブ事業開始と同時に運営をスタートし、現在は横浜市内16区26校の放課後キッズクラブを運営しています。この座談会では、これまで多くの子どもたちの放課後を支えてきたキッズクラブの主任と20年を振り返りました。

【参加者】

- 伊藤 宏子（秋葉小学校放課後キッズクラブ 主任）
 福富 由紀子（日吉南小学校放課後キッズクラブ 主任）
 田辺 美代子（岡村小学校放課後キッズクラブ 主任）
 大津留 宏美（南瀬谷小学校放課後キッズクラブ 主任）
 滝澤 晴美（飯島小学校放課後キッズクラブ 主任）
 野田 由美（進行／キッズ運営課長）

※記載内容は2024年10月時点のものです。



【キッズクラブの運営】

- 2004年 横浜市「放課後キッズクラブ事業」スタート
 2004年 9/1 開設:太田・港南台第三・笹野台・能見台・長津田・折本・秋葉・南瀬谷
 2005年 9/1 開設:寺尾・宮谷・本町・岡村・日吉南・桜井
 2006年 9/1 開設:名瀬
 2007年 9/1 開設:浦島
 2008年 9/1 開設:瀬ヶ崎
 2014年 小学校施設を活用した放課後キッズクラブの全校展開
 2015年 放課後子ども総合プラン／子ども・子育て支援新制度施行
 3/1 開設:南・永田・上矢部・飯島・瀬谷さくら
 4/1 開設:十日市場
 2016年 3/1 開設:上寺尾・和泉
 2019年 3/1 開設:城郷
 2019年 すべての市立小学校に放課後キッズクラブを設置
 2020年 新型コロナウイルス感染症に伴う限定受け入れ
 2021年 新利用区分の創設
 区分1 :わくわく…「遊びの場」として放課後から16時まで実施
 区分2A :すくすく(ゆうやけ) …「遊びの場」及び「生活の場」として放課後から17時まで実施
 区分2B :すくすく(ほしぞら) …「遊びの場」及び「生活の場」として放課後から19時まで実施
 ※区分2A・2Bは保護者が就労等により放課後の時間帯において、子どもを保護・養育することが難しい世帯の児童（留守家庭児童）のみ利用可
 2022年 学校休業日（土曜日を除く）の開所時間の前倒し

【文中での表記について】

・「キッズ」は「放課後キッズクラブ」の略です。 ・「はまっこ」は「はまっこふれあいスクール」の略です。

◇キッズクラブに携わることになったきっかけ

【伊 藤】2004年に回覧板ではまっ子スタッフの募集を偶然見つけて、こどもが好きなのでやってみたいなと思いスタッフになりました。スタッフになって半年後に放課後キッズに転換し、さらにその半年後に副主任になり南瀬谷小キッズと桜井小キッズで勤務して、秋葉小キッズに主任として戻ってきました。



伊藤主任

【大津留】私も2004年に回覧板で募集を見てはまっ子スタッフとして働きはじめました。4月からスタッフをはじめ翌々年に南瀬谷小キッズの主任から声を掛けられて副主任になり、1年後に主任として港南台第三小キッズに異動、その2年後からこれまで南瀬谷小キッズで勤務しています。

【田 辺】2001年に自分のこどもが通っていた岡村小学校ではまっ子が立ち上がりました。はまっ子立ち上げ時に実行委員会で一緒だった校長先生に声を掛けられてスタッフになり、前任の主任から引き継いで今に至っています。



田辺主任

【福 富】日吉南小はまっ子で7年間非常勤職員・主任として勤務し、2005年に港北区の小学校のキッズが開所になるタイミングで日吉南小キッズの主任になりました。日吉南小学校は当時、港北区で児童の人数が比較的少なく、空き教室もたくさんあったことが港北区で最初にキッズクラブになった決め手でした。

【滝 澤】免許や資格を持っていなかったことが気がかり

だったのですが、こどもと関わる仕事がしたいと思い背中を押されてはまっ子のスタッフになりました。当時は最長6年しか勤務できなかったためスタッフとして6年経験し、一度退職して障害者支援施設で勤務していましたが、再び声を掛けられて主任になりました。

◇はまっ子からキッズへ

【野 田】2004年に横浜市が、地域住民中心に運営されていた「はまっ子ふれあいスクール」から放課後キッズクラブ事業を開始しました。よこはまユースの前身の横浜市青少年育成協会も2004年に8カ所開設し、翌年は6カ所と増やしていきました。

【伊 藤】当初、キッズを運営していたのは横浜市青少年育成協会と社会福祉法人はとの会の2法人だけでした。

【野 田】運営と併せて、中間支援として2015年から2019年まで都筑区のキッズ転換支援も受託していました。毎日のおやつの写真撮って送ってもらったり、主任のみなさんにはいろいろと協力いただきました。

【田 辺】はまっ子スタッフを対象に、研修の講師もやりましたよ。

【野 田】今では地域立ち上げ型NPOや民間企業など100以上の法人がキッズを運営しています。

【伊 藤】そう思うと、私たちはキッズの先駆けを作ったんですね。

【福 富】2005年に日吉南小キッズが開所した際には保護者や学校の先生からまだ認知されておらず「どうしてキッズが一教室取ってるの?」と言われることもありましたが、年月を経て小学校との関係性がだんだん築けてキッズが確立されてきたように思います。

【大津留】「キッズって何?学童?」とよく聞かれて、「キッ

ズと学童は違うんですよ」と説明していましたが、今はキッズが認知されていますよね。

◇現在のキッズクラブの役割

【野 田】2015年に放課後児童健全育成事業が開始してからは条例で放課後児童支援員の資格ができた、こどもの人数に応じた職員の配置や、部屋の面積からこどもの定員を算出することも求められるようになりました。

【伊 藤】横浜市のキッズは「放課後子ども教室事業」と「放課後児童健全育成事業」の両方を担っていて、すべてのこどもたちの「遊びの場」に加えて「生活の場」としても受け入れているので大変です。

【福 富】両方の良いところ取りをするのはこどもの人数が少なくてスペースがあれば叶うのですが、高学年の授業が終わるまでは1つの部屋で多くの児童が過ごしているのでトラブルも起きます。見えないところで片付けをしないと、ものが壊れるとか、周りの人にぶつかっても何にも言わないとか…。スタッフの人数からしても、目は比較的行き届いており、気が付けばもちろん注意もしますが、キッズの中でもルールは守ってほしいなと思っています。

【野 田】放課後子ども教室推進事業は定員が定められていませんでしたが、放課後児童健全育成事業は定員が定められるようになり、「遊びの場」として利用するこどもたちも含めて16時まで1つの部屋で過ごしているというのは課題ですよ。



野田課長

【福 富】開設した2005年当時は留守家庭児童が2,3人でした。現在、「遊びの場」として利用している児童は1日に10人程度、留守家庭児童の方が90人程度で圧倒的に多いです。

【野 田】保護者の就労証明書の提出が求められるようになり、留守家庭児童がこんなにいたんだ、ということも分かりましたよね。

【伊 藤】「遊びの場」として利用していたこどもの登録がコロナの3年間を経てめっきり少なくなりました。現在は留守家庭児童の利用がほとんどで、普通にキッズに遊びに来るこどもは減っています。

【田 辺】学年が上がるにつれて保護者の送迎なしで帰宅できる時間帯までの利用が増えるので、17時以降の利用も減っています。おやつも16時に提供するので大変です。

【滝 澤】運営マニュアルもどんどん分厚くなっていますよね。

◇こどもにとっても保護者にとっても安心安全な場所

【大津留】キッズ立ち上げ当時は、青少年育成としてこどもの成長を見守ることが目的でしたが、今はだんだん子育て支援で保護者の立場に立った運営に変わってきていますよね。特に夏休みなどの長期休みは8時から19時までキッズで過ごして、家に帰って寝るだけになってしまうと保護者と顔合わせる時間は数時間だと思います。

【福 富】こどもたちは保護者に気を遣っているような、学校では気を張っているような、キッズが気を抜ける場所になっているように感じます。それが家庭への支援、ひいてはこどもたちへの支援につながっているのかもしれないですね。

【伊 藤】保護者のニーズには合っていると思います。こどもたちも自由に過ごせるし、保護者としても大人の目がある中で見てもらえるので安心。昔は女の子を家に1人で留守番させるのが心配という声の方が多かったのですが、最近は1人で家にいると何をするか分からないから心配という理由で、男の子の利用の方が多いです。

【田 辺】外国につながる児童も増えて、こどもを介して保護者に連絡事項を伝えてもらうこともあります。保護者も大変ですが、こどもも保護者に協力しないといけなくなっているのは時代の流れだなと感じています。

【大津留】体調が悪くなって熱を測ろうとすると、「お母さんに電話しても迎えに来られないから測らない

で」というこどももいました。測らないとだめだよと言って測りますが、保護者に気を遣っていますよね。

【滝 澤】私も少し前までは、キッズではいい子にしているこどもが多かったように思うのですが、今はスタッフが注意しても聞いてくれないこどもが増えています。保護者に家での様子を聞くとキッズと同じような状況なので、キッズでも家でも変わらないんです。

【野 田】地域によって違うところもあるのかもしれないですね。こどもの本質は以前と変わらないものの、保護者の働き方などの変化に伴ってキッズで過ごすこどもたちの様子が変わっているんでしょうね。

◇災害やパンデミックを乗り越えて

【野 田】コロナ禍で小学校では臨時休業や分散登校もありましたが、キッズは休まず開所しましたね。

【大津留】自分もスタッフも感染したら閉所になってしまうというプレッシャーはありました。手がボロボロになるくらい消毒したり、マスクも2重にしたり。

【野 田】2011年の東日本大震災も金曜日に起こって、保護者の方が迎えに来られずキッズでお泊りしたこどももいました。今は学校の安全計画の中にキッズも入っていて対応が整理されましたが、当時は取り決めがなかったので大変でしたね。

【大津留】朝6時に警報が出たらキッズは準備が整い次第開所したり、休校になったらキッズは開所したり、学校とすり合わせがされてきていますよね。

【福 富】YOKOHAMA EYE'Sの2011年号に「放課後キッズクラブでの被災児対応」について載せているので、みなさん読んでみてください*。

*よこはまユースHP <情報発信>

YOKOHAMA EYE'S 2011(2012年3月発行)

◇こどもたちの笑顔につながる仕事

【野 田】日々、大変なこともたくさんあると思いますが、どんなときにやりがいを感じますか？

【大津留】プログラムで作った作品をこどもが家に持って

帰って、保護者から「こどもが楽しみに参加しています」とか、「家で飾っています」と話してくれるのは嬉しいです。先日もハロウィンの仮装をして校内を練り歩いたら、先生方から「キッズは色々なことやってくださるんですね」と言ってもらえて、来年はさらにグレードアップしようかなという気持ちになりました。お迎えに来た保護者にも「すごいじゃん」とこどもが声を掛けてもらっているのを見ると、よかったなと思えますね。いろいろなことがあります、携わっているスタッフも私もこどもが好きでこどもの笑顔を見たいがために20年近く仕事を続けられています。

【滝 澤】私も仕事行くの嫌だなんて思った日は1日もないです。でも、みなさんそうだから続けてますよね、いい仕事だなと思います。

【福 富】まわりの若い保護者世代に声を掛けても、「子育てが終わったばかりだからこどもとは少し距離のある仕事がいい」と返されることもあります。それだけこども



福富主任

の対応は大変ですし、対応についても研修を受けてアップデートしていく必要もありますが、いろいろな人を相手にする仕事なので面白いなと思います。

【大津留】こどもたちはスポンジが水を吸うように、日々たくさんのことを吸収していますよね。そうした時期に自分たちが携わるといことは他の仕事では経験できないし、こどもたちが道ですれ違った時に声を掛けてくれたり、卒業して会いに来てくれたりするの嬉しいですよ。

【伊 藤】卒業生が大学生になってアルバイトとして戻ってきてくれるのは嬉しいです。秋葉小キッズではアルバイトを卒業する学生に「友達や後輩を紹介してね!」とお願いしているので、ずっとOB・OGが関わってくれています。

【田 辺】「キッズクラブで働いてみない?」と声を掛けると、「働いてみたい」と言ってくれる学生が多いです。小さなことでも積み重なると大きな財

産になるので、地域にいる以上はこどもたちを大事にしていかなくちやいけないと思っています。

【福 富】大学生になって戻ってくるということはキッズにいい思い出があったからってことですよ。

【伊 藤】長年勤務しているスタッフもいるので、「帰ってきた」という安心感があるんでしょうね。

【野 田】それはみなさんが10年、20年と長く続けているからこそですね。

◇多世代と関わる場

【大津留】一方で、そろそろ世代交代を考えなくてはいいかなとも思います。副主任が育って主任になりたいという流れができるいいなと思います。若い世代にどんどんアピールして主任・副主任になってもらえたら嬉しいです。



大津留主任

【野 田】主任・副主任やスタッフがすごく楽しそうに働いている姿をこどもたちが見て、自分もそうした仕事に就きたいと思ってもらえるといいなと思います。

【大津留】キッズは1つの社会なので、おばあちゃんやおじいちゃん、お姉さんお兄さんなど幅広い年代のスタッフがいるのが理想ですよ。

【伊 藤】秋葉小キッズではこどもへの叱り方なども特に統一はしていません。ルールもある程度はスタッフに任せています。「今日、こんなことを許しちゃった」などの共有はしますが、こどもたちが社会経験を積む場としてスタッフがいろいろな接し方をしています。

【福 富】「主任はキッズの中で偉いから、注意されたら聞こうかな・・・」と思っている児童もいるのです。スタッフは全員こどもたちのことを思って声を掛けていますので、誰の言うこともしっかり聞いてほしいなと思います。

【伊 藤】スタッフの呼び方も、キッズが始まった当初はニックネームで呼んでいましたが、距離が近くなっ

てしまうので「さん」付けに変わりましたよね。

【田 辺】「先生」と呼んでいるキッズもありますね。

【福 富】はまっ子時代の前任の主任が元校長だったこともあって、そのころからの続きで「先生」と呼ばれてしまうこともあります。

【伊 藤】こどもたちには「〇〇先生」と言うとおうちの人は学校の先生なのかキッズのスタッフなのか分からなくなってしまうから、キッズでは先生と呼ばないでね」と話しています。

【大津留】こどもとの距離感も難しいですよ。人懐っこくて膝や背中に乗りたがるこどももいます。

【伊 藤】こどもが膝に乗ってきたら「すぐに立たなきゃいけないから」、背中に乗ってきたら「後ろは助けられないから」と離すようにしています。

【野 田】本当はぎゅっとしてあげたいときもあると思いますが、もどかしいですね。

◇プログラムの変化

【野 田】こどもの健全育成に加えて子育て支援などが増えたりとキッズにいろいろなことが求められますが、運営面やプログラムの充実などでやっていきたいことはありますか？

【大津留】よこはまユースの運営するキッズ全体で目玉になるプログラムがあるといいですよ。各地域や区ごとにイベントができるとスタッフ同士のつながりもできるのではないのでしょうか。

【滝 澤】以前はいろいろなプログラムを実施していて、お出かけも多かったですよ。今は行かないこどもも増えたので、おでかけするスタッフと留守番するスタッフの確保も必要になっています。

【伊 藤】以前はこどもの人数が適切だったので、アウトドアのプログラムなどいろいろなことができていました。今は参加するこどもが100人となると尻込みしてしまいますね。キッズというものが親のニーズで必要な場所、あって当たり前場所になってしまい利用児童も増えると、こまめな手厚いことがしてあげられない。とにかく毎日無事に終わることで精一杯なのは残念だなと思っています。

【福 富】他の港北区の小学校のキッズでは人数が多く

てサッカーボール・野球遊びはダメ、バドミントンも危ないなど遊具も自由に使えないなど校庭遊びも制限が多いと聞いたことがあります。日吉南では小学校に準じて学校が禁止している遊具はキッズでも使用しないので、バドミントン専用の日をつくってイベントにしたり、工夫しています。

【滝澤】学校によって違いますね。飯島小キッズではプラバットは使えなくなりましたが、特に制限はないです。イベントも以前は参加人数が多かったのですが、最近では声を掛けてもそれぞれ各自で遊んでいて、参加しないことも増えました。でも、各自で楽しそうに遊んでいるのでいいかなとも思います。



滝澤主任

【福富】バスケットボールやサッカーのプログラムに「初めてでも大丈夫だよ」と声を掛けても、「初めてだからやらない」という子どももいます。

【大津留】実施できるプログラムが少なくなっているのは寂しいですね。準備も大変ですが、昔のことを知っている私たちが音頭を取って、下の世代のスタッフも引き継ぎやってみようと思えるきっかけができるといいなと思います。世代交代で昔のキッズを知らない人たちが多く寂しい気もするし、これまで実施したプログラムも何をやったかは記録に残っていますが、どういうやり方をしてきたのかも引き継いでいきたいです。

【福富】ただ、時間も限られていますよね。15時にキッズに来てから仕事を始めると帰宅の16時までには終わらない子どももいて、スタッフが助けることもあります。15分くらいで簡単にできるものにはしているんですが、子どもによってペースは違うので仕方ないですね。

【田辺】20分くらいでプラバンやアイロンビーズが完成する子・できない子に分かれるので、プログラムを組むのが難しいです。学校が早く終わる日は1時間くらいの余裕があってもクラブ活動などがあると高学年は参加できないですもんね。

【野田】学校によって授業時間や下校時間も変わってきていますよね。

【大津留】時間が詰め込まれていて、授業についていけない子どももいるんだろうなと思います。

【野田】今は勉強を教えることはしていませんが、キッズで過ごす時間が長くなると学習支援も求められるかもしれないですね。

【田辺】キッズで宿題を終わらせてほしいという要望はあります。

【福富】夏休みの午前中は10時までは静かな時間にして、勉強や読書をして過ごしています。最近では授業や宿題もタブレットを使うようになっていて、紙の宿題が少なくなってきたと子どもから聞きました。今はキッズでタブレットを使わないようにしていますが、今後は対応も必要になるのかなと感じています。

【伊藤】学習指導や実験工作などのたくさんのプログラムを実施している民間学童を利用することもありますが、キッズが選ばれているのはとにかく安心安全だからですね。

【野田】保護者からのアンケートでも、キッズに求めるのは「子どもがキッズで元気に過ごしてくれていること」という声が多いです。



まだまだ話は尽きませんが、あっというまに時間がきてしまいました。これまで保護者の働き方やニーズに応じた事業の見直しなどがあるたびにキッズは柔軟に対応してきましたが、みなさんが長年大切にくださっている、学校・地域とのつながりの中で子どもたちを見守り支援していくことはこれからもずっと変わらないと思います。本日はありがとうございました。

■ 青少年の学習支援・生活支援の20年

青少年が抱える課題が深刻化・複雑化する中で、小・中学生が生まれ育った環境に左右されることなく未来を切り拓く力を身につけるため、2010年代から全国的に学習支援・生活支援が始まりました。ここでは、横浜市内で「寄り添い型学習支援事業」の開始当初から携わる団体と、よこはまユースが取り組む「寄り添い型生活支援事業」の歩みを振り返ります。

青少年への学習支援活動における今までの20年とこれから

特定非営利活動法人リロード
理事長 池田 正則

◇中高生世代への学習支援活動の「現在まで」

当法人は全国的にはあまり学習支援活動が始まっていなかった2008年（平成20年）より、保土ヶ谷区生活保護課（当時）との協議によって、貧困状況による高校進学困難な中高生の学習支援事業を公民連携で始めた。

当時は横浜市において少子化の影響が高校・大学受験に大きくなく、現在のような多様な進路も整っていなかったこともあり、横浜市での全日制高校進学率は全体で91.5%、生活保護世帯では54.5%（2008年3月卒業生）であった。そのため『学びの機会の保障』という観点で生活保護世帯の子どもの学習支援事業がスタートした。

その後、厚生労働省の委員会などで生活保護受給世帯の世帯主が出身世帯でも生活保護を受給している割合が約25%程度であるという、いわゆる『貧困の連鎖』がクローズアップされて生活保護に至らないよう「第2のセーフティネット」として2015年（平成27年）4月より生活困窮者自立支援制度が始まった。その取り組みメニューの1つとして子どもの学習・生活支援事業があり、全国で中高生世代への学習支援が行われていくことになって、他にも地域での活動、学習支援を主体とする団体等様々な形態での取り組みがなされるようになり、10年が経つ。横浜市では「寄り添い型学習支援事業」（健康福祉局所管）「寄り添い型生活支援事業」（こども青少年局所管）という名称で全18区において実施している。合わせて2016年（平成28年）に「義務教育の段階における普通教育に相当する機会の確保等に関する法律」成立し、より多様な学びの保障が行われるようになってきている。

◇学習支援活動の「これから」を考える～何を目的とするのか？

2023年（令和5年）の寄り添い型学習支援事業利用者（多くは生活保護世帯・ひとり親世帯の子ども）の高校進学率は、民間の教育サービスとしての通信制高校など多様な進路選びが可能となったことと入学制度の多様化のため、98.4%まで上昇した。いわゆる「学校歴」という学歴は以前より獲得できるようになっている。学習支援を行う側、つまり大人側は「学校の成績上昇や進学ができれば上昇機会も多くなる」という価値観になり、そのために横浜市寄り添い型学習支援事業の受託事業者も受験対応教育サービスである学習塾系の事業者が数多く選定されている。

学習支援活動を提供する側が教科学習でいい内申点を取り、高等学校に進学していく以外の方法を考えられていないのである。

「教育」ではなく、「学習」支援だからこそ、受験対応に特化している教育サービスの指導でなく、社会で生きていくための「自律」「自立」への力や人と人との関わりから学ぶ力、体験の機会から学ぶ力など総合的な生きる力を子どもたちが自ら学習することで獲得する時代だと学習支援を行う側が認識するようになっている。生涯学習の学びの中で、教科学習的な内容は、その人が学ぶ意欲と取り組み方さえ学べばいつでも取り組めるようデジタル教材も含めツールは充実してきている。これからは、子どもたちに学びの場を用意する大人側が『何を目的として学習支援活動を行うのか』が強く問われていると考えている。

変わったこと変わらないこと —よこはまユースの寄り添い型生活支援事業—

よこはまユース 事業課

寄り添い事業担当係長 吉田 智之

よこはまユースが「困難を抱える青少年のための寄り添い型支援事業」の運営を始めたのは2012年。

それまでも、学習支援事業や他団体との共催による課題を抱える子どもたち対象の事業を行っていましたが、特定の子どもたちと継続的に関わりながら自立を支援する寄り添い型生活支援事業は、健全育成を主戦場としていた法人にとって挑戦的な取り組みでした。現在は3区を受託しています。

寄り添い型生活支援事業は、生活困窮状態にあるなど養育環境に課題があり、支援を必要とする家庭に育つ小・中学生等を対象とした横浜市の委託事業です。経済格差や貧困の連鎖が社会課題として顕在化してきた頃に始まり、現在では全18区で展開しています。

当法人が受託運営を開始してから十数年、この間、寄り添い型生活支援事業は市の方針や運営の実態に対応しながら少しずつ変わっています。当法人が運営しているA区では事業開始当初10時～19時としていた開所時間が、10時～21時次いで11時～20時と推移しています。午前中は子どもたちの利用がなく、部活動を終えてから来所する中学生にとっては少し遅い時間まで開所している方が利用しやすいということが、運営を通じて判ってきたためです。現在は、時間を限定しないより柔軟な対応に変わっています。

保護者からの子育て相談に対応することも事業者に求められていましたが、2016年度に「生徒及びその保護者への個別相談」「安心して過ごせる居場所の提供」が、支援内容として要綱に明記されました。子どもたちに対して指導的な関わるのではなく、気持ちや状況に‘寄り添い’ながら‘支援’するという当事業の方針が明確に示されたと考えます。

事業の変化に合わせて運営の仕方を変えてきた私たちが、開始当初から変わらず大切にしていることもあります。子どもたちに体験や交流を通じて成長してもらいたいという想いです。

活動において子どもたちは、同世代の仲間だけでなく様々な年代の大人たちとも関わります。一緒になって遊んだり一緒に叱られてくれる大学生、根気よく宿題を手伝ったり温かな軽食を用意してくれるシニアボランティアなど多様な人たちとの関わりにより、自分が大切に思われていることを子どもたちは実感できます。また、みんなで卓を囲んで食事をしたりお風呂に入る等の体験からは、人の温かさを感じると共に、生活マナーや他者との距離感も学べることで、こうした体験・交流の中で生じた考えや思いを深めることで、子どもたちの学びや自信、自己肯定感が育まれると考えています。

現在、よこはまユースが運営する事業所の対象は「原則、中学生まで」となっているため中学卒業後の子どもたちの様子を知る機会ほとんどありません。そこで、芽吹きかけた自立の力を支えてくれる人や場につなげることが課題になっています。幸い当法人は、高校生以上の若者の活動をサポートする青少年施設をいくつか運営しています。この強みを活かし、それぞれの施設に子どもたちをつなげることで自立に向けたサポートを継続的に行っていきたいと考えています。



「理科実験を通じた大学生との交流」(寄り添い型生活支援事業所)

座談会

「平成の青少年と令和の青少年が語り合う ～私たちの社会参加活動～」

青少年期の社会参加活動は、新しい出会いや価値観にさらされながら、自分が好きなこと・苦手なこと・やってみたいことを見つめ、自分自身を獲得できる機会となります。また、チームで活動したり、人の役に立ったり助けられたりする経験は、まさに「社会の一員であること」を意識できる場です。私たちは、さまざまな場所や手段により、青少年たちが「社会に触れる」きっかけとしてのボランティア活動を実施してきました。チャレンジを尊重し、過程に寄り添い、時には厳しい声かけをすることもありました。

今回は、20年前にボランティア活動に関わってくれた「元・青少年」と、現在ボランティア活動を頑張っている青少年たちとともにボランティア活動について語り合いました。そこから見えてきたのは、時代を経ても変わらず「悩みながら成長している青少年たち」でした。

【参加者】

- 佐野 主真さん（大学3年生。社会参画プロジェクトメンバー。就職活動に奮闘中）
- 中村 美詞さん（大学1年生。社会参画プロジェクトメンバー。高校生の時から様々なボランティア活動に参加）
- 重田 友恵さん（元ふりーふらっと野毛山青少年委員（2004年～2009年）。子育てと保護犬の世話に忙しい毎日）
- 浜辺 隆博さん（元ふりーふらっと野毛山青少年委員（2007年～2009年）。四国に赴任中。海辺のまちづくりに奔走）
- 塩嶋 瑤子（事業課職員。入職4年目。社会参画プロジェクト担当職員）

【進 行】

- 七澤 淳子（事業課長。20年前のふりーふらっと野毛山勤務時に青少年のボランティア活動や青少年委員会を担当）

○2024年10月16日（水）オンラインにて実施

【キーワード】

●ふりーふらっと野毛山

2002年開設のユースセンターで正式名称は「横浜市青少年交流センター」。愛称「ふりーふらっと野毛山（ふりふら）」。年間約9万人の青少年が利用した青少年の居場所づくりや体験活動を推進する施設。2016年3月に耐震工事のため閉館。*本稿では「ふりふら」と記述します

●青少年委員会

青少年の視点でセンターの運営を考えたり、子どもや青少年向けのイベントを企画・実施したりするボランティア活動。任期1年間で中学生から24歳までの青少年で構成。さくらリビングにも引き継がれ、現在も多くの青少年が活動している。

●社会参画プロジェクト

2022年にスタートした大学生世代を対象としたプロジェクト。「社会とつながるイベントや体験を高校生に提供しよう」を趣旨とし、今年は3つのテーマ（①高校生の居場所づくり ②異年齢交流 ③はじめてのボランティア）に分かれて活動。



ふりーふらっと野毛山
（2002～2015年）

◇20年前の青少年と現在の青少年の皆さんに今日は集まっていたいただきました。共通点は「よこはまユースのボランティア活動に参加している」ことです。まず、皆さんが関わっている・関わっていた活動について教えてください。

【佐野】今は「異世代交流」をテーマにした活動に参加しています。大学1年生の時からボランティア活動を始め、このプロジェクトに参加するのは3年目です。高校生の頃はコロナ禍で活動が制限されていたこともあって何もできなかったのが残念でした。

【中村】佐野さんと一緒に活動しています。今は小学生と高校生が関わる企画を考えていて、冬に縁日をやりたいと思っています。高校時代は音楽ライブを企画したり、フードフェスでごみの分別を呼びかけたりしていました。大学生になり何か打ち込めることはないかなと思ってこの活動に参加しました。

【重田】高校1年生の夏休みに、課題のためにふりふらで子ども対象の活動に申し込みました。課題のためにボランティアすることに罪悪感があったのですが、説明会で職員が「きっかけは何でもいいから挑戦することに意味があるんですよ」と言ってくれて気持ち楽になりました。その後すっかりハマってしまい(笑)、青少年委員はじめ、よこはまユースが主催する様々な活動に参加しました。

【浜辺】重田さんとは同い年で、今日も久しぶりに会えてとても嬉しいです。私は高校生の時ふりふらを利用して勉強したりバスケットをしたりしていた時に、職員から「ボランティアやってみない?」と声をかけられたのがきっかけです。ちょうど進学が決まった頃で、大学に入ったら何でもやってみよう!と思っていました。青少年委員会では委員長も経験しました。



浜辺さん

◇大学生の2人は多くの活動の中からなぜ「社会参画プロジェクト」を選んだのですか?また、やっていてどんなことが楽しいか教えてください。

【佐野】よこはまユースで他のボランティアをしていた時、職員さんが声をかけてくれたのがきっかけです。3年間続けていられるのは、職員さんが優しいからです!僕は北海道出身なので、プロジェクトで市内のあちこちに行く機会があって、ボランティアを通じて横浜を知ることができている気がします。新しいことを知ったり学べたりすることがとても嬉しいです。

【中村】高校生の時は好きなことを活動にしていました。「音楽が好きだから」とか「環境問題が気になるから」とか「フェスに行ける!」とかで選んでいました。「異年齢プロジェクト」を選んだのは、私は実は子どもが苦手なので「子どもを知りたい」と思って。子どもだけでなく高校生とも交流できる活動だったので、やりやすそうだなと思って申し込みました。大学生になって行動範囲が広がり、今まで関わらなかったような人たちと出会うことが楽しいです。

【重田】中村さん、苦手なことを進んでやるってすごいと思う!私も活動している時は、子どもにケガさせちゃったらどうしようとか、小学生のオリジナルルールに「何言ってるの?」って思っただけで続けているので気持ちがよく分かります。

【浜辺】私は高校生の時は人に興味がなかったんです。でも、ふりふらに行くと職員から話しかけられたり、子どもが絡んできたりで嫌でも人と関わらなきゃいけなくなりました。そんな経験は初めてだったけど、意外と居心地よく感じるんだということが分かったし、もう少し関わってみたいと思ってボランティアを始めてみたんです。中村さんは「子どもが苦手」だと自覚したのがまずスゴイし、さらにステップアップして関わろうとしているので当時の自分からすると2段も3段も上をいっている印象です。

【塩嶋】中村さんは子どもへの苦手意識に変化はありましたか?

【中村】子どもって意外と大人なんだなと思いました。実際に小学生と関わってみて、悩みを話してくれたり、みんな考えているんだなと感じました。色々な家族のあり方があることも知りました。子どもによって全然違って「子どもっておもしろいな」に変わりました。



社会参画プロジェクト企画会議(2024年)

◇ 「子どもっておもしろい」に変わったんですね。活動を通じて視野が広がった、価値観が変化したということを知るのはとても嬉しいことです。そういえば重田さんは、ボランティアがきっかけで子ども関係の仕事に就きましたね。

【重田】 小学2年生ぐらいの女子がベビーカーを押しながらもう一人の弟を連れて、よくふりふらに遊びに来ていたんです。今では「ヤングケアラー」という名前がついていますが、当時も「大変だなあ」と思っていました。お姉ちゃんが友達と遊ぶように「赤ちゃんを見ているよ」と声をかけたんですがうまくお世話ができなくて悔しかったんです。保育が学べる学部に進学後、児童養護施設や保育園などで働きました。本当はよこはまユースで働きたかったんですが(笑)。

【塩嶋】 ボランティア活動が、将来の選択に影響を与えたんですね。

◇ 浜辺さんは施設の利用者からボランティアになりました。何か不安はありましたか？

【浜辺】 ふりふらが好きだったから不安はなかったです。利用者時代は職員さんにたくさん話を聞いてもらいました。ふりふらは音楽が流れてて、図書館だとあり得ないのでそれも良かった。ピアノが好きで体育館で弾かせてもらったり、大学の合格発表もふりふらのパソコンで見たりしました。重田さんたちが活動しているのも、勉強をしながら見ていました。中高生は、青少年委員を始めるのに保護者

の承諾がいるんですが大学生になるといらないので、大人になった実感がわいて承諾書にサインしたのが運の尽きでした(笑)。

■コロナ禍でボランティア活動のあり方は変わった!?

【浜辺】 佐野さんと中村さんが企画している「冬の縁日」。青少年委員会でもいろいろなお祭りをやったことを思い出しました。なぜ縁日をやりたくなったんですか？

【中村】 私たちの世代はコロナ禍で地域のお祭りが中止になることが多く、夏祭りを経験していない子も多い



中村さん(左) 佐野さん(右)

のではないかと思います企画しました。子どもたちと大人が一緒に思い出を作る機会になったら嬉しいです。

【重田】 今の学生たちはコロナ禍があって、やりたいこと・楽しみにしていたことができなかつたり諦めざるを得なかつたりした世代なんですよ。今、チャレンジできる環境ができて心から良かったと思います。

【七澤】 コロナ禍といえば、デジタルツールが一気に進みましたよね。私は今年の4月に9年ぶりに管理部門から事業部門に異動したのですが、「令和のボラ活」に衝撃を受けました(笑)。今は広報から申し込み、説明会、打合せもスマホひとつで何でもできる。イベント当日でお互い初めて会うことも珍しくない。20年前は、電話やFAXで申し込んで説明会に参加して(注:PCのメールは既に普及していましたが学生はまだ“ガラケー”の時代でした)、活動までに顔を合わせるからミスマッチは少なかったように思います。どっちがいいとかではなく、活動の仕方やコミュニケーションのあり方が変化していることは事実ですね。オンラインがあるからこそ今日4人と会うことができたし。変化はしたけど、ボランティアを始めたのは職員のひとことがきっかけだったり、人との関わりの中で自分自身の変化を感じたりするのは20年前も今も変わらないと思いました。



青少年委員会定例会(2007年頃)

◇先輩たちに質問です。「大人になった今思う、青少年の頃にボランティア活動に参加してよかった」と思うことはどんなことですか？

【浜辺】企画力やコーディネート力が鍛えられたことですね。職員さんにどこまでお願いしようか、メンバーには何をしてもらおうかを考えたり、当日もタイムテーブルを作ったりしました。これは仕事にもとても活きていて、今はマネージャーとしてどう指示をしたら分かりやすいか役に立っています。

【重田】私も企画力は蓄えられたと思う！あと、コミュニケーション力かなあ。青少年委員は中学生から社会人までいて、年齢関係なくチームで活動できたことはいい経験でした。大人になった今も、全然知らない人でもすぐに打ち解けられる自信があります(笑)。

◇大学生の皆さんはいかがですか？

【佐野】このプロジェクトは企画をイチからやるので、僕も少しは企画力が身に付いたような気がします。大学では学べないことなのでとても役に立ってます。あと、就活でグループディスカッションがけっこうあるんですが、プロジェクトで初対面の人と交流する機会が多いので、コミュニケーションや会話の切り口なども役に立ってる気がします。

【中村】高校生で初めてボランティアをした時「自分には何もないな」と思ったんです。変わりたいと思ってボランティアを続けています。今4年目ですが、

成長したかは分からないです。先輩たちはボランティアしてみても変わった!と思ったことはありますか？

【重田】今日の座談会みたいに「あの時こうだったなー」とか振り返る機会がないと、なかなか変化には気づけないよね。チャレンジし続けていることが中村さんの強みだと思うし、子どもとの関わりの中での気づきは必ずプラスになっていると思います。

【浜辺】がむしゃらにやっていると、自分が今どこにいるのか、何を目標しているのか分からなくなることは当然だと思います。イベントの終了後とかに感想を言い合ったりした時に、他の人の感じたことをちゃんと受け止めることができれば、成長しているんじゃないかと思います。

◇「成長」は自分自身では、そして渦中にいると分からないものですね。活動を振り返った時にきつと見えてくるものがあると思います。それでは「良かったこと」の逆に、大学生の皆さんがいま活動で悩んでいることはありますか？

【佐野】就活で忙しくて活動になかなか参加できていないのが悩みです。先輩たちは忙しい時期に学生生活とどう両立していましたか？

【重田】忙しい時には抜けていました(笑)。バトンタッチして他の人に頼る。自分がリーダーだったとしても回るように役割分担をしていいと思います。就活は大事なことなんだから、周りにヘルプして頼っていいと思うよ！

【浜辺】自分も忙しかった時はボランティアをしなかったし、他にやりたいことがあった時はやっていました。でも、もしボランティアに全力投球したい気持ちがあれば就活を休む選択もありだと思う。

■メンバーがなかなか集まらない！

どうしたらいいんだろう…

【中村】私の悩みはメンバーが忙しくて全然集まることができてなくて…。今回の企画も会議に参加したメンバーだけで決定して、決定事項をメールで送って「これでいい?」「議事録読んでおいてね」で決まってしまう。メンバーの意見を引きだせる

方法を知りたいし、全員の意見を聞かずに決めていいのか、フワッとでいいから全員の意見を取り入れるべきなのか悩んでいます。

【重田】大変な悩みだ。自分が気にしているならいろいろと試してみていいと思う。意見に乗っかりたい人もいるから、決めてしまうことが悪いわけではないと思う。みんなの意見を取り入れたいなら、まずは職員さんに進め方を相談してみたらどうだろう。



重田さん

【浜辺】考え方が違うのは社会に出てたくさんある。大変だろうけど、あえて妥協しない心も大切にしてほしいと思う。メンバーそれぞれ限界が違うので、そこは見極めて尊重することも大事。

【佐野】自分自身も今、就活でなかなか参加できずに心苦しく思っています。昨年もイベントが終わった時にホッとしたと同時にもっと集まれたんじゃないか、もっとできたのではないかとも思いました。

【浜辺】その思いを持つことが大切なことだからね。失敗も大切な経験となる。気負わないで活動してほしいと思う。

【七澤】両立については20年前の若者も同じように悩んでいましたね。私は「ボランティア活動は、自分の心と身体に余裕があつてはじめて充実するもの」と考えていて、青少年たちにその時々伝えてきました。別に「やらなきゃいけない」わけでもないですよ。「やってよかったな」と思ってくれたら嬉しいし、そう思ってもらえるように私たちは頑張るわけです。

【塩嶋】私もそのスタンスに賛同します。「社会参加」ってボランティア活動だけではないですから、いろいろな経験を積んで、吸収してほしいと思います。

◇ 皆さんがボランティア活動をするにあたって、大人にはどんな風に関わってほしいと思いますか？

【浜辺】今になって思うのは、職員さんは安全管理とか保護者とのコミュニケーションを丁寧にしてもらっていて、私たちとの役割分担をちゃんと考えてもらっ

ていたんだということ。やりたいことをやらせてくれた環境だった。活動で頻繁にふりふらに通っていたし、活動がない時にも遊びに行っていたから、僕たちのことをよく見てくれていたんだと思う。

【重田】自分たちで考えて自分たちで提案してそれを実現させてくれることが本当に良かった。困った時には助けてくれて相談に乗ってくれて、自由度が高かったおかげでそれぞれがやれることをやることのできたし楽しい活動ができていたのかなと思います。今は、オンラインや月1回の会議では、決めなきゃいけないことがたくさんあつて雑談なんかできないよね。私たちは、対面だったこともあるけど会議が始まる前に雑談して、意見を出しやすい環境づくりをしたり、関係性を築いてから会議をやっていたから意見も言いやすかったし、リーダーが決めても不満がなかった。雑談は意外と大事で、メンバー間の関係性を深めたいのなら、会議の前の時間を大切にしてみたらいいんじゃないかな。

【中村】職員さんは自由にやらせてくれてるけど、私はもう少し活動を進めたい気持ちがあります。何かに本気で打ち込みたいと思ったから私は活動しているけど、メンバー間の熱量が違うことにも悩んでいます。

【重田】全員が同じモチベーションになることは残念ながら、ない(笑)。これはボランティアだけでなくどんな場面でも。目標に向かって「自分はこれが頑張れる」「Aさんはこっちを頑張れる」などチームで補っていく方がいいと思います。でも、いま経験していること、悩んでいることはものすごく社会勉強になっていると思う。「あの時悩んだなあ」って。もっと職員さんの手を借りたらいい。1人で背負わないでね。

【塩嶋】3年間、メンバーたちの自主性を大切にしながら関わってきましたが、自主性を意識しすぎていたのかもしれない。途中から連絡がつかなくなってしまう学生もいて、厳しくアレコレ言うのも嫌だし、私自身も職員としての関わり方に悩んでいた部分があります。今日の座談会で、関わり方を見直すことができた気がします。

【七澤】青少年との関わりで私たち職員も育てられるんですよ。座談会、やって良かったです(笑)

◇最後に、先輩たちから、いま頑張っている後輩たちにエールをお願いします。大学生の皆さんは今日の感想をお聞かせください。

【浜辺】今やっていることに全力で立ち向かったら、この先の未来において無駄になることは一つもないので、どんどんチャレンジしてほしいです。また、先日、青少年委員の後輩がお店を開店したからぜひ来て!と久しぶりに連絡があって、当時のメンバーたちに会いたい気持ちが強くなりました。今の仲間たちとの関係も大切にしてほしいですね。

【重田】20年経って、コロナ禍を経て、私たちがやっていた合宿やボランティア活動のやり方は今では考えられなくなっています。あの頃は顔を合わせて語り合ってたけど、今、こうやってZOOM会議をうまく利用したり、大人の力を借りながら今の時代に合ったコミュニケーションを取って頑張りたいです。イベントの成功ももちろん大事だし、ボランティアと言っても責任があるし、仕事じゃないけどモチベーションを保たなければならないし、けっこうボランティアって大変だよ。大人になった今思うのは、イベントの成功だけではなく、ボランティア活動を通して出会った仲間が大きな財産であること。20年経っても繋がっている友達ができたことがボランティアをやっていたよかったことです。2人もそんな出会いを大切にしたいです。

【佐野】20年前からこういった活動が続いているのがすごいと思いました。当時と状況が違ってもいい、自分自身の課題を再確認できたし、これからはいろいろとチャレンジしていきたいと思いました。

【中村】もっと人と関わろうと思いました。コミュニケーションが大事なんだと改めて思いました。今日はとても勉強になりました。ありがとうございました!

【塩嶋】青少年に関わる職員として、今日は先輩ボランティアの皆さんたちからたくさん「関わりのヒント」をいただいた気がします。そして、活動を振り返って言葉にする機会って改めて大切だなと思いました。佐野さんと中村さん、引き続き一緒に頑張っていきたいですね。



■座談会を終えて

20年前の青少年と今の若者。活動のきっかけは「声をかけられた」ことだったり、仲間たちとの関係や学校やアルバイトとの両立に悩んだりすることは時代が変わっても同じでした。私たちは、青少年が社会参加活動を通じて、葛藤したり達成感を味わったり心が動くさまざまな体験を積み重ね、自分や他人を大切にしたい気持ちを養い、社会の一員としての役割を見つけていってほしいという思いを持っています。それは20年前も今も変わりません。これからも、青少年がさまざまな「社会」に触れる機会を横浜の皆さんとともに作っていきたいと思います。

この20年間で「若者は忙しくなったなあ」と感じます。学校のほか、部活やサークル、塾や習い事、バイト、SNSでの情報収集…。就活で言える「何か」にも取り組まなくてはなりません。座談会の中で、「オンラインでは雑談する時間が取りにくいね」という発言がありました。以前は、活動前後の「ちょっとした余白」が繋がりを育みました。今は社会全体に余白が少なくなったように思います。時代に合った余白をどのように生み出していくか、私たちが永遠に取り組む課題です。しかし、オンラインツールを駆使し活動をサクサク進め、アイデアをその場で可視化する令和の若者たちの頼もしさよ!(もちろん、毎日来館してたくさん話してたくさん遊ぶ平成の若者たちもパワフルでしたよ!)

私自身は、この座談会で重田さんと浜辺さんから「20年前の仕事の答え合わせ」をもらった気がします。いまの青少年たちが大人になった時に「やってよかったな」と振り返ってもらえる日がくるように、よこはまユースはじめ青少年の社会参加に関わっている大人たちは次の20年も頑張っていきます。(事業課長 七澤淳子)

子ども・若者の居場所と関係者のつながりづくり

—— よこはまユースと横浜市立大学の連携

横浜市立大学名誉教授・石巻専修大学教授

高橋 寛人

子ども・若者の居場所研究会

横浜市立大学は公立大学なので、市大の教員には地域貢献が求められます。私は2022年3月まで30年以上市大に勤務した教育学者です。よこはまユースと連携・協力して、子ども・若者の支援に携わる団体や関係者の交流の場づくりと、高校内居場所カフェの創設をすすめてきました。

今から12年ほど前、市大を会場にして、よこはまユースとの共催で「子ども・若者の居場所研究会」を始めました。横浜市こども青少年局の関口昌幸さんからの呼びかけで、横浜市内で子どもや若者の支援をしている人々のための研究会を、よこはまユースの富岡克之さん、尾崎万里奈さんと運営することになりました。報告者への謝礼は、はじめの2年間、よこはまユースが支出してくれました。（3年目からは市大の助成金からも謝金を支払うようになります。）

実際に子ども・若者の居場所づくりや支援・伴走に携わっている人々に経験を語っていただくもので、研究会というより交流会です。開催日時、報告者やテーマが決まるとfacebookで広めます。見た人がシェアしてくれるので、子ども・若者支援に携わっている人々に広まります。メンバーが決まっているわけではないため、毎回テーマに応じていろいろな方々が集まってくれました。平均すると30人くらいの参加者でした。

2012年7月に第1回を開催、2015年3月までの間に2～3か月に1回のペースで研究会を続けました。報告していただいた方は、岩本真実さん（K2インターナショナル）永岡鉄平さん（フェアスタート代表）塩谷茂さん（児童養護施設杜の郷）岩永牧人さん（ユースポート横濱）村田由夫さん（元寿福祉センター）池田正則さん（リロード）ほか、20名をこえました。



子ども・若者居場所研究会

研究会はふつう金曜日の午後6時30分から2時間程度です。研究会終了後も参加者の方々がいつまでも残って挨拶したり話し合いをして、会場の締め切りをすぎても帰ろうとしません。そこで、金沢八景駅のそばの居酒屋に20人くらいが輪になってすわれる座敷があるので、報告のあとは毎回、感想や意見を飲みながら語り合うことになりました。

横浜・子ども青少年に関わる活動関係者の大交流会

「子ども・若者の居場所研究会」の会合を重ねるうち、「横浜市内で子どもや若者のための活動を行っている人々が集まる会を開こう」という声に参加者の間から高まりました。よこはまユースが事務局を担当してくれることになり、10団体のメンバーが青少年育成センターに集まって準備にとりかかりました。市内の関係団体を調べて意向を尋ね、プランを練り、チラシを作成して、SNSで呼びかけて参加者を募りました。

そして、2015年1月12日に、よこはまユースの横浜市青少年交流センター（当時は西区老松町にありました）を

会場に、「第1回横浜・子ども青少年に関わる活動関係者の大交流会」の開催にこぎ着けました。前半は参加22団体それぞれの活動紹介、後半はテーマごとにグループに分かれての話し合い、その後は全員の交流タイムでした。大交流会は毎年引き続き開催されました。コロナ禍の期間は一部オンラインになりましたが、2023年より対面開催が復活しています。

寄り添い型学習等支援に関する運営団体の意見

さて、2013年に生活困窮者自立支援法が制定され、翌年から生活困窮家庭の子どもへの学習支援・生活支援事業に対して、国からの補助金の交付が始まりました。横浜市はいち早くこの事業に取り組み、2015年には全区で寄り添い型学習等支援事業が展開されます。市内18区で各区1箇所、鶴見区と中区は各区内2箇所、市内合計20箇所になりました（よこはまユースは当初から現在まで西区の生活支援事業を運営しています）。学習支援・生活支援に関わる団体のスタッフやボランティアの多くが、「子ども・若者の居場所研究会」のリピーターでした。これらの方々から、この事業について団体間で経験交流や意見交換をする場がほしいという声が寄せられるようになりました。

そこで、2015年8月に市大で「寄り添い型学習等支援を考えるシンポジウム」、11月にはよこはまユースの青少年

育成センター会議室を会場に「子どもたちの貧困に対して今、何ができるのかを話し合う集い」を開きました。そして、各団体にアンケートを送り、学習等支援の実施状況・効果・課題等についてたずねました。アンケートの作成と集計は、「福祉と保健の生活課題を考える会」代表の岡田朋子さんの協力を得ました。

さらに、翌年2月に「寄り添い型学習等支援を考える研究会」を市大で開催しました。寄り添い型学習等支援の意義・成果を確認し、そして子どもたちにとってよりよい支援のために、大切なものは何か、どのように改善していくべきかなど話し合いました。横浜市が学習支援の委託団体を評価する基準の一つとして、高校への進学実績を重視している点に批判が集中しました。少子化の中、ちょっとした工夫でテストの点数を上げて合格させることは簡単です。重要なのは、子どもに自己肯定感をもたせ、学習への意欲を高めることです。そうしなければ、高校に合格しても中退してしまいます。

アンケートと運営団体の意見をまとめて、2016年3月に、報告書『横浜市寄り添い型学習等支援の検討-----研究会での委託法人関係者の意見とアンケートから』を作成しました（翌年に増補改訂版をつくりました）。横浜市役所で福祉・教育関係職員に、この報告書の内容についてプレゼンする機会を持ちました。



第1回横浜・子ども青少年に関わる活動関係者の大交流会(2015年)

学習支援のためには居場所づくりが必要です。報告書から抜粋します。

「学習・生活支援の必要な子どもたちの多くは自己肯定感、自己有用感を持たず、学力や学習意欲が低い子どもたちです。……大人に対して不信感を持っている子どももめずらしくありません。子どもたちが……喜んで来るためには、子どもたちにとって居場所となることが必要です。」

学習支援は塾に委託すればよいと考えがちですが、それは大きな誤りです

「子どもをかかえる生活困難家庭は……失業・雇用不安などの経済的困窮だけでなく、……疾病、障害、地域での孤立などで困難を抱えています。そこで、これらの困難への対応について、関係機関、関係者や、支援団体につなげることでできる団体が学習・生活支援に携わることが有効です。」

福祉的支援につなげられる団体が学習支援を行うことが求められます。

高校内居場所カフェ

ところで、横浜市立大学では2011年度から「教員地域貢献活動支援事業」を始めました。これは、「教員が大学の外へ飛び出して、神奈川県・横浜市等の周辺地域の企業、自治体・NPO等の団体と連携し、調査や研究を行う」もので、大学から事業推進のための研究補助金が支給されます。

この頃、大阪府立西成高校の「となりカフェ」や神奈川県立田奈高校の「ぴっかりカフェ」など、高校内居場所カフェがスタートしました。「子ども・若者の居場所研究会」に「となりカフェ」の田中俊英さんや「ぴっかりカフェ」の石井正宏さんなどを呼んで、カフェの魅力や運営方法などについて話してもらいました。高校内居場所カフェは、楽しくユニークな新しい試みとして新聞やウェブ記事にしばしば取り上げられ、注目を集めます。高校内居場所カフェの実情と意義を探るために、高校内居場所カフェを対象として市大の教員地域貢献活動支援の研究事業を進めました。

田奈高校でカフェを推進した先生方や石井さんにも加わってもらい報告書を作成しました（『神奈川県立田奈高校での生徒支援の新たな取り組み ― 図書館でのカフェによる交流相談を中心に』横浜市立大学、2016年3月）。

高校内居場所カフェは若者支援の素晴らしい試みなので、横浜市立の高校でも開くよう、田奈高校の報告書を携えて横浜市教育委員会に「営業」に行きました。指導部長や高校教育課長に話しましたが、「素晴らしい試みですが、出すお金がありません」との返事でした。次に、横浜市立横浜総合高校を訪れて天野正人校長（当時）に居場所カフェをセールスしました。ここでは「課題は運営団体と予算だ!」といわれました。そこで、よこはまユースに相談したところ、カフェの運営団体を引き受けてくれることになり、尾崎万里奈さんと2人で天野校長に再度働きかけると、OKとなりました。

その頃、「NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ (ME-net)」の高橋清樹さんも同校にカフェの開設を訴えていたそうです。そこで、カフェは、よこはまユースとME-netさらに「NPO法人横浜メンタルネットワークサービス」の3団体による共同運営となりました。ただし、カフェ運営費の予算措置はありません。これらの団体のメンバーの人件費は団体が負担し、ドリンク代やお菓子代はME-netが受託した若者支援事業の助成金や市大の教員地域貢献活動支援事業費から工面することになりました。こうして、2016年の秋からようこそカフェが始まりました。

ようこそカフェ

カフェは毎週水曜日の午後に開かれます。校内のオープンスペースを会場にして、飲み物・お菓子・軽食などを無料で提供します。生徒たちはカフェで、生徒同士おしゃべりしたり、スタッフやボランティアと話しても構いません。

横浜総合高校は、午前、午後、夜間の3部制の定時制高校です。一般に定時制高校には、さまざまな困難をかかえる生徒が在籍しています。中学校で不登校を経験したり、いじめを受けた生徒がめずらしくありません。中途退学者

や進路未定（就職も進学もしない）で卒業する生徒もいます。保護者の中に、非正規、低賃金のため深夜労働や長時間労働など困難な労働条件で働く人が少なくありません。そこで、親にかわって、食事の支度、洗濯・掃除をしたり、年下の兄弟の面倒を見ていたり、あるいは祖父母や親の介護をしている生徒もいます。

貧困とは何らかの困難の結果であり、またさらに他の困難を生む原因ともなります。複数の困難を抱えていると、自らの困難が何と何であるか、そしてそれらの困難を解決するためにどう取り組んでよいかわかりません。生徒たちは、カフェでスタッフやボランティアと何気なく会話する中で、本音や悩みを話しはじめます。高校生に対する支援は、生徒自身が自分の困難を整理し、それぞれの困難に対応できるようにすることです。ただし、生徒自身の努力で克服できない場合は、スタッフが支援機関につながります。

カフェの成果が認められて、2020年度より横浜市社会福祉基金から「困難を抱える高校生支援事業（横浜総合高校ようこそカフェ運営支援）」として補助金の交付を受けられるようになりました。いまでは「『ようこそカフェ』があるからこの学校を選んだ」という新入生もめずらしくあり

ません。

料理研究家で元横浜市教育委員の長島由佳さんが、「パルシステム横浜ゆめコープ」の支援やボランティアの協力を得て、食育教育の一環と位置づけて軽食を用意しています。毎回多彩なメニューのおいしい料理は、生徒たちから大人気です。もともと、地域の住民や関係団体から食べ物の寄付が寄せられていました。2017年秋、地元のラジオ番組でカフェがとりあげられると、様々の市民、団体から多くの寄付が殺到しました。とくにお米は500キログラムにものぼりました。それがきっかけとなり、カフェでほぼ毎回軽食が提供されるようになりました（コロナ禍中はおにぎり等の配布）。調理や盛り付けを手伝う生徒もいます。料理を通じてボランティアの大人たちとの会話がはずみます。

「パルシステム横浜ゆめコープ」のほか「フードバンク神奈川」からの食材提供、「おてらおやつクラブ」からのお菓子の寄付、「開く会・協働舎」から誕生月の生徒への手作りパンのプレゼントなどの定期的な支援のほか、さまざまな団体や個人から寄付が寄せられます。「横浜市社会福祉協議会」は企業からの寄付を受ける際の仲介をしてくれています。ほかに「横浜南央ロータリークラブ」が生徒を三



横浜総合高校 ようこそカフェ

陸交流BBQ&釜石漁業体験に連れて行ってくれたことがありました。小市聡さん(元横浜総合高校長)が立ち上げた「NPO法人体験活動サポート開港場」が、カフェ事業で実施している就業活動体験のコーディネートをしています。

学生ボランティアがいろいろな大学から来ています。とくに教員や看護師、福祉職を目指す学生には貴重な体験です。このように、カフェにはいろいろな大人たちから寄付が寄せられ、ボランティアをはじめ様々な支援者が集まります。カフェ

は、地域における多様な大人同士の交流の場としての役割も果たしています。

以上に見てきた居場所研究会、大交流会、高校内居場所カフェなど、これらの活動は、地域の子どもや大人、多様な人々がつながる場づくりです。そしてこのつながりは広がっていきます。市大の教員としてこのような地域貢献を果たすことができたのは、よこはまユースの皆さんとの連携・協力のおかげです。



<参考文献>

- 1 柳下換・高橋寛人編著『居場所づくりの原動力』松籟社、2011年
- 2 神奈川県立田奈高校での生徒支援の新たな取り組み ― 図書館でのカフェによる交流相談を中心に』横浜市立大学、2016年3月
- 3 2017年増補改訂版・横浜市寄り添い型学習・生活支援の検討 ----- 研究会での委託法人関係者の意見とアンケートから』横浜市立大学子ども・若者の居場所研究会、
- 4 『横浜市立横浜総合高校(定時制3部制単位制高校)におけるカフェ相談活動の取り組みと意義』横浜市立大学子ども・若者の居場所研究会、2017年
- 5 居場所カフェ立ち上げプロジェクト編『学校に居場所カフェをつくらう!』明石書店、2019年
- 6 柳下換・高橋寛人編著『居場所づくりにいま必要なこと』明石書店、2019年
- 7 横井敏郎編著『子ども・若者の居場所と貧困支援』学事出版、2023年

※2、3、4は横浜市大のウェブページに掲載しているので、検索してご覧になれます。

※ようこそカフェについてくわしく知りたい方は、参考文献4、5の第1章、6の第2章、7の第7章をお読みください。

Ⅲ お祝いメッセージ

ーよこはまユースを支えていただいている皆さまからー

この20年間、私たちを励まし、支え、ともに歩んでくださった皆さまから、心温まるお祝いのメッセージをいただきました。

私たちは、「ヨコハマの青少年のために」という共通の思いを胸に、さまざまな分野で活動される皆さまと連携・協力しながら事業に取り組んでまいりました。

ここに掲載しきれないほど多くの方々に支えられ、今日の私たちがあります。心より感謝申し上げます。



「みんなで力と呼吸を合わせて」(青少年委員合宿 2005年)

■阿比留 久美さん (早稲田大学文学学術員 教授)

大学院生・非常勤時代にふりーふらっと野毛山で「青少年の居場所づくり」全国フォーラムを七澤さん、富岡さんたちと一緒に企画していました。ふりーふらっと野毛山の子どもも若者も大人もごちゃまぜになって過ごしている雰囲気が好きだったなー。その後もおりにふれて、フィールドワークにうかがわせていただいたり、大交流会に参加させていただいたりしています。

よこはまユースは人と人、団体と団体をつなぐハブのような役割をいろんなかたちで担っているのがすごいなと思います。今は、ゼミの卒業生がよこはまユースの職員になっていて感慨深いです。これからもよろしくお願いします！

■荒井 紀美子さん (ガールスカウト横浜市連絡協議会 代表)

この度は創設20周年、心よりお祝い申し上げます。

めまぐるしく変化する社会の中で、時代を見据えた取り組みをされてこられた姿勢にいつも学ばせて頂いてきました。また、活動理念である「青少年がさまざまな人、考え方、体験との出会いを通じて、社会に繋がり、社会で生きる力を育みます」は、私たちの活動にも繋がる姿勢・価値でもあります。

青少年育成センターや野島研修センターは、活動場所としてよく利用させていただいています。職員の皆様の心深い対応に助けられ、多くのスカウト達が活動の成果を得て成長し社会に育っていきました。いつも事業に追われて、感謝の言葉もお伝えして来なかったように思います。ここで改めて、子ども達やリーダー達の学びの場を提供して頂いてきたことに、心より感謝いたします。

最後となりますが、よこはまユースの今後の益々のご繁栄を心より祈念しております。

■磯野 秀夫さん (大道芸ボランティアの会/さくらリビング連携団体)

いつも青少年との「つながり」を取っていただきありがとうございます。これからも楽しい「ボランティアの機会」を提供したいと思います。

今後ともよろしくお願いいたします。



地域との交流(ふりーふらっと野毛山)2008



■魚地 昌彦さん（横浜市健民少年団 団長）

この度、設立20周年を迎えるとのこと、心よりお祝い申し上げます。

健民少年団とよこはまユースは、長きにわたり、横浜の子供たちの健やかな成長を願い、様々な活動を行ってきました。特に印象に残っているのは洋上セミナーです。この活動を通して、参加した子どもたちやリーダーは大きく成長しました。これからも、健民少年団とよこはまユースは、連携を深め横浜の未来を担う子どもたちを共に育てていきたいと考えています。

皆様の変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

■貝川 弘行さん（総合型地域スポーツクラブ まる倶楽部会長）

公益財団法人よこはまユース（横浜市青少年育成協会）設立より20周年誠にありがとうございます。

2010年神奈川区青少年活動拠点事業立上げから大変お世話になりました。当時の地元の様子は今では懐かしく思い出されます。よこはまユースの皆様のお陰様を持ちまして、事業展開で開始したB-SKY FES、中高生の居場所GROVEは現在も発展を続け、参加の子ども達、保護者、運営スタッフ、関係者など沢山の笑顔を集める事が出来ております。

中学校部活の地域移行にも発展してきております。講師派遣でもお世話になり、沢山の学びを頂く事が出来ました。様々なご配慮に心から感謝です。

益々のよこはまユースのご発展をお祈り申し上げます。

■金子 利恵さん（泉区副区長／元横浜市こども青少年局青少年育成課長）

先日、ある人から「『青少年』って言葉、いつまで使うんでしょうね。」と言われ、ハッとしました。確かに、『ビジネスマン』を『ビジネスパーソン』と言い換えられているように、男女共同参画の視点で考え直した方が良いかもしれません。

翻って『よこはまユース』、『青少年育成協会』から平成23年に名前が変わりました。誰が命名したのか、先見の明がありますね！これからも『よこはま』の「今」の『ユース』の声を聞き、一歩先行く視点で、サポートをよろしくお願いいたします。期待しています。



放課後キッズクラブ



■蒲谷 武雄さん（横浜市立本町小学校 主幹教諭）

設立20周年を心よりお祝い申し上げます。

横浜市青少年育成協会の設立より20年を迎えたということは、そのころ「太田小キッズクラブ」で勤務をしていた私も、あの頃より20年の歳月を迎えたということを感じ、時の流れの速さを感じます。

協会設立当初は、横浜市の新事業である「放課後キッズクラブ」の運営のために、協会の職員の方々も私たち主任指導員もめまぐるしく忙しかったですね。新しい事業のため、運営のための各種マニュアルを作ることも大変でしたし、活動プログラムも試行錯誤しながら、みんなで話し合いを重ね作っていたことをとてもよく覚えています。当時は、「野島研修センター」や「ふりーふらっと」「こども科学館」など協会が管理する様々な施設とも連携して活動することができ、毎日たくさんのプログラムを行っていました。その時のことは、あの頃子どもたちと集まった時も「本当に楽しかったよなあ」と思い出したり、懐かしんだりしています。

今後も青少年健全育成として、「青少年が人とのつながりのなかで成長していくことができる社会」の実現のために、私たち学校教職員と共に頑張っていただけたらと思っております。

■坂本 昭夫さん（海をつくる会）

公益財団法人よこはまユース様 20周年記念を謹んでお祝い申し上げます。

貴社の理念である「青少年が健やかに育つことを見守り、その場所作り等の活動、そして見守る人材の育成等」のご功績と、皆さまの日々のご尽力に敬意を表すと共に、今後のさらなるご発展とご隆盛を祈念いたします。

これまでの環境講座「いま、横浜の海でおこっていること」「親子で学ぶ海のSDGs」や、実践活動の「干潟観察会」「オールクリーン野島ビーチ」等とともに開催でき、当会が関わることができたことが大変嬉しく、これからも共に歩み、ご協力ができればと願っております。



野島カヌー体験プログラム



■桜庭 友見さん (ライオンズクラブ国際協会330-B地区 横浜みなとみらいLC)

かもん未来塾でのお手伝いは、子ども達の笑顔と誠実なスタッフの方々に後押しされて充実した時間を過ごすこととなりました。

ライオンズクラブの女性チームで月に一度の食事作り、その活動にご賛同いただいた横浜ベイホテル東急のご協力で、総料理長自ら足を運んでいただき、美味しい食事と魔法のように仕上がったお洒落なテーブルレイアウトに目を輝かせていた子供たちの喜んだ顔が今でも目に浮かびます。今年の夏休みにはホテルバイキングにご招待いただき、「人生最高の夏休み」と叫んだ子どもの笑顔を見ることができたのは、こちらの方こそ人生最高の日だったかもしれません。

■志村 友規子さん (特定非営利活動法人オーシャンキッズ 理事長)

この度は設立20年を迎えられたこと、誠におめでとうございます。

よこはまユースには10年前、「北山田小学校放課後キッズクラブ」の運営法人を立ち上げる際にサポートをしていただきました。地域総がかりで子育てに取り組む環境を築きたいとの思いがあるだけで何もわからない不安な状況でしたが、丁寧にご指導をいただきまして、不安をひとつひとつ解消しながら無事にスタートすることができました。またその後も、仲間として共に取り組んでこられましたこと大変心強く感じております。子どもたちの今と未来のため取り組みたいという人たちの思いが実現できるよう、よこはまユースには活動を応援いただける存在としてこれからも導いていただけたらと思っております。

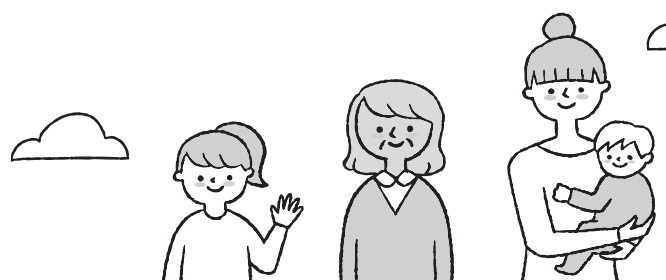
■杉田 怜英さん (さくらリビング 青少年委員)

中学1年の夏に初めてさくらリビングを訪れ、そして11月に青少年委員に加入し、気づけば7年の月日が流れていました。初めは大層な理由もなく、なんとなくで始めた青少年委員でしたが、委員の方や利用者さん、スタッフの皆さんとの交流は私にとってかけがえのないものであり、さくらリビングは私にとって大切な居場所となっていました。

7年間の経験をもとに、これからは居場所を作る側としてよこはまユースの居場所づくりにより貢献することができればと思っております。



賛助会員事業「陶芸教室」



■鈴木 武道さん（ボーイスカウト横浜市連合会 会長）

この度は、「よこはまユース」が2025年2月に設立20周年を迎えられる事を、心からお祝い申し上げます。前身団体の「横浜市青少年育成協会」を設立されてから、早、20周年を迎えられ、横浜市の青少年の健全育成ために、長年ご尽力をされていらっしゃる事に深く敬意を表します。

私ども「ボーイスカウト横浜市連合会」とは、同じ横浜市の青少年の健全育成という同じ目標に向かって、活動を推進する「横浜市青少年5団体」の仲間と共に、これからも、お互いに切磋琢磨して、協力し合い、そしてお互いに補完し合って参りたいと思っております。

これからも、更に相互の関係を深めて、協力を進めて参りたいと思っております。「よこはまユース」の今後の更なるご活躍と、発展を心から祈願致します。

■関 勝則さん（横浜海洋少年団 団長）

公益財団法人よこはまユースとしての再出発から20年。その前身で1974年に設立された社団法人横浜ボランティア協会から数えると50年を迎えられました。その歴史の中で常に横浜における青少年育成活動をリードしてこられたことに敬意を表し心から感謝を申し上げます。

横浜海洋少年団も2023年に創立70周年を迎えましたが、よこはまユースとの連携を進める中で青少年の健全育成に取り組んで参りました。

昨今では青少年が巻き込まれる事件や事故が後を絶たず、また生きづらさを感じている青少年も少なくありません。私たち大人には子供たちに寄り添い見守るという責務があります。引き続きパートナーとしての関係を深めつつ子供たちと積極的に関わって参りましょう。この度は誠にありがとうございます。



全国青少年の居場所づくりフォーラム(2009)



■関口 昌幸さん（横浜市政策経営局共創推進課／元 こども青少年局青少年育成課担当係長）

私が「よこはまユース」の皆さんと本格的に仕事をさせて頂いたのは、2006年から2012年まで。それまで国や自治体において、思春期や青年期の市民を対象にした施策や事業の枕言葉であった「青少年」が、「子ども・若者」という呼称へと変化した時期に丁度あたります。

呼称の変化は青少年の交流や健全育成を主とした従来までの「青少年行政」から無業やひきこもり、経済的困窮など困難に直面する子ども・若者たちへの社会経済的な自立支援を旨とした「子ども・若者行政」への変化を意味し、本市の青少年育成の中間支援組織だった「よこはまユース」の事業内容やその組織の在り方も抜本的な転換が迫られたのでした。

そんな青少年行政の大きな転換点にあたって、私は青少年育成課の担当係長としてよこはまユースの仲間たちと、これからの子ども・若者行政のあり方について日々激論を重ねました。また、話し合うだけではなく、教育委員会と連携した新たな小中学生の体験学習の仕組みづくりや高校の居場所カフェの取組など、これまでにない子ども・若者行政の新機軸を共に額に汗しながら生み出して行きました。

それから10年以上の月日が経った現在、子どもや若者たちが主体的に意見を発し、活動することで、持続可能な社会づくりに積極的に参画する「こどもまんなか社会」の形成に向けて、再び「よこはまユース」の仲間たちと共に仕事ができることは、本当に嬉しく、誇らしいことです。

■冢田 三枝子さん（野島クリスマスキャンプ実行委員会 代表）

設立20周年おめでとうございます。

個別支援学級の子どもたちを集めての野島クリスマスキャンプをずっと支えてくださり、ありがとうございます。子どもたちがたくさん楽しさと思い出を抱いて「またね～」と、野島研修センターに手を振る姿を見るたびに、来年も!という気持ちになります。そんな実行委員の気持ちに寄り添って、よこはまユースのみなさんが代々と引き継いでくださるノウハウやアイデアは私たちの宝物です。よこはまユースのボランティア精神と子どもたちや若者の育成に傾ける情熱が、益々横浜の地に根を張っていくことを願ってやみません。



アフリカ開発会議開催記念「ユースミートアップ」(さくらリビング2019)



■長島 由佳さん（ユカナガシマクッキングサロン主宰／ようこそカフェ運営委員）

目の前にいる子ども達や青少年の「可能性」という見えない宝物を輝かせるためのひと時を創出するために、私たち大人はいるのだと思います。そのための事業・活動は、穏やかな心を保ちながら、強い意志を持って真っ直ぐに進んでいかなければ達成できません。優しく浸透していくエネルギーをどれだけ多くのココロとカラダに注いで来たことでしょうか。その時間を共有できたことに感謝し、さらなる愛情表現とそのための活動の一助になれる「未来」を楽しみにしたいと思います。

■南雲 純子さん（横浜市子ども青少年局放課後児童育成課 担当係長）

設立20周年おめでとうございます。

よこはまユースの皆様とのご縁は、平成17年、私自身の子どもが放課後キッズクラブに通っていたころからです。熱心で子ども思いのスタッフの方々に感銘し、放課後の時間を楽しく過ごしていたことを今でも鮮明に覚えています。その後、業務としても放課後事業を始め、子どもアドベンチャーでの夏祭り体験等の企画、野島青少年研修センターでの宿泊などでもご縁があり、子どもとの関わりについてたくさん学ばせていただきました。特にキッズクラブは設立当初から現在に至るまで、事業の発展と児童の育成にご尽力いただき大変感謝しております。

今後も、子どもたちの未来と、より一層安心して過ごせる居場所づくりを支えていただくよう、心より期待しております。

■認定NPO法人子ども支援センターつなぐさん（青少年育成センター連携団体）

創立20周年、誠におめでとうございます。

横浜市青少年育成センターには、当法人設立当初から研修やセミナーなどで会場や設備を利用させていただいています。セミナーの設営や広報の相談などにも乗ってくださるなど、日頃より多くのお力添えを頂き感謝申し上げます。

貴団体の今後ますますのご躍進を心よりお祈りいたします。



オールクリーン野島ビーチ



■福田 富士雄さん (かもん未来塾 ボランティアスタッフ)

法人設立20周年、おめでとうございます。

私は、平成26年6月、都筑スポーツセンターで寄り添い型学習ボランティア募集のチラシを見て応募、面接後採用され、7月よりかもん未来塾でボランティアを始めました。

始めた頃は前職が災いしたのか、また気負いもあり、読み・書き・そろばんをベースにおいた学習支援をしてしまいました。しかし、ここ2～3年のうちに学生ボランティアも増え、学習が従、遊びが主になり、学習も含めた生活支援になったような気がしたので、私も子ども達のニーズに合った声かけや見守りを心がけるようにしています。私は週1回の関わりですが、子ども達の成長を実感しています。

■藤井 和子さん (認定NPO法人エンパワメントかながわ理事)

この度は20周年をお迎えされましたこと、誠におめでとうございます。

エンパワメントかながわも2024年9月に設立20周年を迎えました。この20年間で子どもをめぐる社会情勢も大きく変化をしてきました。心に抱いた苦しい思いを身の回りにいる人にはなかなか話せない子どもたち。居場所や仲間づくりなど子どもたちを支援していく幅広いよこはまユースの皆さんの活動に多くの子どもとおとなが支えられてきたことと思います。

すべての子どもたちが大切な自分を守って生きていってほしい… これからも子どもたちを見守るおとなとして、よこはまユースの皆さんと同じ思いをもって共につながり、活動をしていけたら幸いです。

■堀谷 沙貴さん (横浜市立みなと総合高等学校 教諭)

よこはまユースには、前任校の高校内居場所カフェ「ようこそカフェ」の立ち上げからお世話になっています。前例のない取組に、私たちは何度も話し合い、生徒第一に試行錯誤を続けました。逆境となったコロナ禍も一緒に乗り越えました。そんなカフェも来年で10周年の老舗です。

また、岩手県釜石市での漁業体験、福島県矢祭での農業体験など、生徒とともに様々な場所へ連れて行っていただきました。カフェや就業体験先では関わる大人に大切にされ、のびのび過ごす生徒たちの姿を見ることができました。他にも、ここには書ききれない感動や失敗や学びがありました。私も来年、教員10年目を迎えます。ユースの皆様と、ともに経験した様々な出来事に育てていただきました。これからも、生徒ともどもよろしくお願いいたします。



さくらリビング交流スペース



■松田 考さん(公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 こども若者支援担当部長)

設立20周年を心よりお祝い申し上げます。

思い返せば私が入職して間もないころ「横浜にとっても素敵な青少年の居場所があるらしい」という噂が札幌まで流れてきました。ワクワクして見学に向かったものの「ふりーふらっと」とは名ばかりの、どえらい急な坂を上らされたことは今でも忘れません。中に入ってみると、集っている青少年とスタッフの皆さんを見て「何だか分からないけどいい距離感だなあ」と羨ましく感じたことも、いま思い出しました。

行儀の悪い坊主頭を叱りながら笑いあう。勉強している中学生の隙間時間にスッと入っていく。トゲトゲしている高校生をさりげなく活動に誘う。

今にして思えば、この「距離感」こそ、私たちユースワーカーの腕の見せ所なわけですが、私とその原点を見たのは横浜の坂の上でした。これからはよこはまユースが、行政や関係団体にとっても、若者たちにとっても「なんだか分からないけどちょうどいい距離にいる素敵な人たち」であり続けることを願って、お祝いの挨拶といたします。

■松本 豊さん(横浜市子ども会連絡協議会 会長)

よこはまユース設立20周年を心よりお祝いいいたします。青少年健全育成に幅広い分野にわたって取り組み、素晴らしい成果をあげていらっしゃることに敬意を表します。

私ども横浜市子ども会連絡協議会が、今年11月に開催しました「指定都市子ども会横浜大会」では、分科会のファシリテーターをよこはまユースの皆さまに担当していただき、素晴らしいアピールへ導いてくださいました。また、日頃より横浜市青少年五団体のご支援、青少年の健全育成にかかわる情報のご提供、行事や会議で施設のご提供など多くの場面でご支援いただいていますことに深く感謝しています。

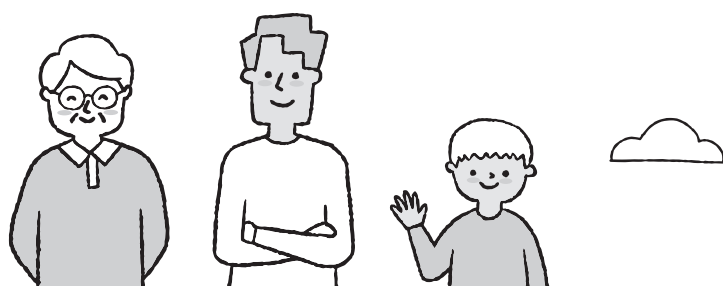
これからのよこはまユースのますますのご発展とご活躍をこころよりお祈り申し上げます。

■水野 篤夫さん(ユースワーカー協議会代表/元 京都市ユースサービス協会事業部長)

20周年おめでとうございます。

京都で青少年活動を続けている中で、自分たちがやっていることを言葉にしたり、社会課題に向き合った新しい取り組みを模索したりしたくて、野毛にあった「ふりーふらっと」を訪問したのが、よこはまユースの活動に触れる最初だったと記憶しています。京都の施設との違いと共通性、やってくるやんちゃも含めた多様な若者たちと逃げずに関わろうとするスタッフの姿に、とても刺激を受けるとともに励まされました。

それ以来、よこはまユースの活動に注目するとともに、関東にいる仲間として付き合い続けられたのはとても幸せなことでした。そして、今も課題に対応した新しいチャレンジを続けていることに敬意を抱きつつ、これからは一緒に若者のために歩みたいと思っています。



■柳家 権太楼さん (落語家)

よこはまユースの皆様にはお世話になっています。

遠い昔に、故六代目古今亭志ん馬師匠にお誘いを受け「古典落語を聴く会」（現在の濱っ子寄席）の高座に上がることができました。その折の嬉しかった気持ちは今でも覚えています。その頃の世話人だった方々が、今の横浜の経済界で活躍なさっています。大向代表理事もそのお一人でいらっしゃいます。

青少年の育成のために、落語会の中でも募金活動をしており、頭の下がる思いが致します。

横浜の地域のため、皆様足を運んでくださいますよう宜しくお願い申し上げます。



「爆笑! 濱っ子寄席」

■余 泰順さん (公益財団法人神奈川ゆめ社会福祉財団)

設立20周年おめでとうございます。

貴団体とは、当財団設立当時、「子どもたちに寄り添った支援をしたい」と言う私の言葉を聞いた方に連れられて訪れた「校内カフェ・ようこそカフェ」でご紹介いただいたのが出会いのきっかけとなり、それ以来、今日に至るまで、交流会の企画運営に携わって頂いております。

交流会では、スタッフの皆様にご協力いただき、子どもたちが笑顔で楽しむ様子から若者との関わり方や地域団体とのつながりをつくっていただき、当財団の運営には欠かせない存在となっております。

これからも、子どもたちの未来を応援する団体として、共に歩み続けていただけることを心から願います。

■米岡 美智枝さん (西区第4地区社会福祉協議会 会長)

よこはまユースのお名前は市長公舎前の「ふりーふらっと野毛山」のお披露目の会で知りました。

桜木町ぴおシティに移られた後も、第4地区社協の活動にご協力いただいています。さくらリビングの皆様の「みんなの食堂」へのボランティアは若い方々に地域活動を体験し意義を感じていただける機会と有難く思っております。かもん未来塾の皆様にも、もっと沢山「みんなの食堂」のお弁当を食べていただきたいと願っております。子どもたちが自分を大切に生きていけるように、よこはまユースのご活動を心より期待しております。



野島クリスマスキャンプ(2024)



ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちのための情報誌

YOKOHAMA EYE'S 2024

2025年2月 発行

■ 編集・発行

公益財団法人よこはまユース



〒231-0011 横浜市中区太田町2-23 横浜メディア・ビジネスセンター5階

TEL:045-662-4170 FAX:045-662-7645

Mail:kikaku@yokohama-youth.jp

URL:<https://www.yokohama-youth.jp/>
